

【完結】 高い買い物をす
るはめになった

飛沫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メチャクチャ高い観用少女を目覚めさせてしまったオリ主君が、ローン返済の為に頑張ったり、無自覚に観用少女とイチャイチャする話

目次

高い買い物をするはめになった理由	
1	
高い買い物をした際の取説	11
高い買い物をした後の日常	17
高い買い物をする前からの趣味	24
高い買い物が出来ないので、その分手間をかけることにした	32
ちよつとだけ高い買い物をする	40
趣味と実益を兼ねた高い買い物をする	48
高い物を買えないもの同士の集い	55
高い買い物をしない日の過ごし方	64
高い買い物をするお客様・その一	69
高い買い物をするお客様・その二	78
高い買い物をするお客様・その三	85
まさかの高額キャッシュバック	94
高い買い物の支払いを終える	102
再び高い買い物をするはめになった	114

高い買い物をするはめになった理由

借りている二階建てアパートの向かい側の空き地に、建設業者がやってきた。初めは、コンビニかチェーンの飲食店が建つのかと思っていたが、実際に出来たのは二階建ての洋館風の建物。一体何の店なのかと疑問を抱き覗いてみると、ショーウィンドウに飾られていたのは等身大の少女の人形。それを見て、俺はこの店が何なのか理解する。「へえ、ここ観用少女の店なのか」

観用少女は、最近芸能人や有名な動画配信者の間で噂されている人形だ。しかも只の人形ではなく、生きている人形だとか。

そして、生きている故に自分で持ち主を決める。人形は一日三度のミルクと、持ち主から注がれる愛情を糧とし、持ち主だけに見せる極上の笑みは「この人形を買ってよかった」と思えるほどの素晴らしいものらしい。

当然、そんな特殊な人形な為値段はかなりはるらしいが「どれだけ金を積んでも、人形に選ばなければ手に入れる事ができない」「主人にだけ見せる最高の笑顔」というのが選民意識を刺激するらしく、欲しがる人間は山のようにいる。俺も少しだけ好奇心を刺激され、眠るように目を閉じている人形の足元にある値札を確認するが。

「マジで高いな」

記されている金額は、新卒の初任給二ヶ月分程度の額だった。他のも見るが、金額的には似た感じだ。ショーウィンドウに飾ってある人形でこの値段なら、建物の奥に仕舞われているとっておきは、もっと値段が張るのだろう。しがない大学生である俺には、とてもじゃないが手が出せる品物ではない。

やっぱりこういうのには、縁がないんだろかなと俺は店を後にする。この時は、もう人形とは関わることはないだろうと思っていた。

人形屋が出来て、三ヶ月。最初は、都心でもない場所にこんな店を建てて繁盛するのかと半信半疑だったが、前を通る度に高そうな車が必ず停まっていたから、需要はあるのだと分かった。マジマジと見ていたわけではないので、肝心の人形を連れた人間を見るとこは無かったが。そんなある日、大学の帰りで何時ものように店の前を通っていたら、ドアが開いて店員らしき男が姿を見せた。思わず立ち止まって眺めていると、男はドアの前に張り紙をして中へ戻っていく。何だろうと近寄ってみれば、内容はアルバイトを募集するというもの。仕事の中身は、商品である人形たちへのミルク提供が主で、他には店の掃除と服や小物の整理等とある。仕事自体はそれほど難しくなく、妥当なも

ののように見えるが、時給がおかしかった。

腰が引ける程の高い金額が、提示されているのだ。特殊な資格が必要なのかと、何度も確認してみるものの、張り紙には特に記載はされていない。条件だけ見れば、かなりおいしいバイトに見えるんだが。

(怪しすぎるだろ……)

やはり金額が怖い。この時給では、危ない事をさせられてもおかしくはないぞ。

そんな感じで、店の入口前で固まっているとドアが開いてさっきの男が再び顔を出した。

「いらつしやいませ。ひよつとして、アルバイト希望の方ですか？」

「あ、や、その」

「どうぞ、お入り下さい。今はお客様もいらつしやいませなので」

ドアを開けたまま、中に促される。どうぞって、履歴書も何もないんだが。

戸惑って男へ視線を向けるも、向こうは気づいてないのか「お茶を用意しますね」と引っ込んでしまった。しばらくの間どうしようかと立ち尽くすが、遂に覚悟を決める。

(ええい、入っちゃおう！)

追い出されたら、追い出されただ。話を聞くだけなら(多分)セーフだろうし、資格が必要ならば向こうから断ってくるだろう。

と決心したものの、やはり怖いものは怖い。結局、俺は恐る恐るといった体で店の奥へと入っていった。

二ヶ月後、俺は例の人形屋で仕事をしていた。面接自体は軽く話を聞くだけで終わり、試しにと一体の人形にミルクを渡すと直ぐに採用してもらったのだ。因みに仕事内容は張り紙に書かれていた物だけで、ヤバそうな作業は今のところ言われていない。今日も何時ものように眠っている人形たちにミルクをやり、着替えた服を片付けているところだ。

「おっと」

両手に持てる限りの服を引っかけて移動しようとした時だった。一着のワンピースがスルリと腕から抜けて地面に落ちてしまう。反射的に足で引き寄せようとして、思いどまる。ここに置いてある品は、どれも俺が普段買っている値段よりゼロが一つや二つ多い品ばかりだ。面接の時に出された茶すら、金額を聞いて噓せそうになつたくらいだし。

この服だつて値段は聞いていないが、気軽に洗濯機へ入れられないくらいフリルや刺繍が縫い付けられている。確実に俺が持っている服全部足しても、届かない値段設定だ

ろう。破いたら事だ、ちゃんと手を使って拾わなくては。

しやがみこもうとして、また思いとどまる。この状態で屈めば、持っている他の服を床に付けて汚してしまう可能性がある。それはそれでまた面倒だ。仕方がない、ここは一度服を置いてから戻るか。

考え直して、立ち上がる。すると、どこからともなく手が延びてきて床に広がったワンプリースを拾い上げると、俺の腕にかけてくれた。礼を言おうと視線を向けて、口を開いたが言葉が出ることはなかった。

息を飲む程綺麗な人形が、其処に立っていたからだ。俺の貧弱な語録じゃ例えても伝わるか解らないが、満月の夜を擬人化したらこんな感じになるんじゃないやなからうか。

黒い髪は、途中でグラデーションがかっているのか毛先では藍色になっており、両の金の瞳は月と星明かりを集めたかのようにキラキラと輝いている。肌は白いが病的な白さではなく、程好い白さで髪と瞳の色を引き立てていた。

元々人形だから、どれも完璧な美しさや可愛らしい顔立ちをしているが、これは群を抜いて綺麗だ。人を狂わす美しさって、まさにこれの為に存在する言葉なんじゃないかと納得してしまいそうになる。

「……………あ？」

と、ふとここである事に気付く。コイツ……………誰の人形だ？

耳を澄まして、店長がお客と商談する部屋の様子を探ってみる。何も音は聞こえてきていないし、人の気配もない。今日、預かっている人形の中にも、これはいなかった筈だ。いたら、直ぐに解るし。

「あの……どなたの人形？」

訊ねてみるも、返答は無い。まあ、人形が喋った場面は見たことがなかったから、あまり期待はしていなかったが。

人形は微動だにせず、ひたすら俺のことを見つめている。いくら人ではないとはいえ、これだけ綺麗な顔にガン見されると恥ずかしくなってきたので、ファイと視線をそらせばなぜか人形は移動して、視界の中に入り込もうとしてきた。地味な攻防を繰り返していると、店長が部屋に入ってくる。

「伊達くん。明日の仕事なんですけど、頼んでいた洋服一式が届くので、最初にその仕分けを……おや、望月」

途中、店長が人形に気付き声をかけた。当然、人形は応えない。そして、とんでも無いことを口にする。

「伊達くんが望月を目覚めさせたのですか」

「はあ。」

俺が、この人形を？

「え、店長。今名前呼んだじゃないですか。基本的に、人形って持ち主が名前付けるって」

「ええ、基本的にはですがね。しかし、職人が最高傑作だと自負できるような出来の子には“銘”が付けられる事があるんです。この子は望月、先日亡くなられた高名な職人の最後の逸品ですよ。先程届いたばかりだったのですが、まさか伊達くんを見て目覚めるとは、予想もしていませんでした」

マジかよ。だが、銘付きというのは納得できた。確かに今までみた人形の中で、飛び抜けて綺麗な顔しているからな。しかし、まさか仕事していて人形を目覚めさせるとは。

さて、どうするか。人形には『メンテナンス』というモノがある。間違ったり、禁止事項を行った育て方をして不具合が起きた場合、職人に預けて直してもらえるのだ。『望まぬ目覚め』をやってしまった場合も、メンテナンスに出せば初期状態に戻せる。だが、ここで働いている状態では、メンテナンスに出して戻ってきた瞬間にまた目覚めようから、意味がない。辞めるのもな、仕事の楽しさと時給の良さを考えると目覚めたいなさをさすきる。

「店長、因みにこの人形……いくらですか」

『買い上げる』という単語が頭をよぎったので、訊いてみる。正直、これだけ綺麗な顔

をしている人形だから、手元に置くのもわるくないと思えたのだ。ローンもきくみたいだし。とはいえ、肝心の値段がどうなのか。

「値段ですか。そうですね、望月でしたらこれくらいが妥当かと」

店長が商談で使っている短冊に値段を書き込んで俺に見せてくるが、その額を見て目玉が飛び出そうになった。だってゼロが七つあるんだぜ!?

マンション買えるぞ!

「人形ってそんなにするんですか? 俺、高くても車くらいだと思ってたんですけど」

「ええ、まあ基本はそれぐらいが高額な部類になるんですけれどね。言っただでしょう?

望月は逸品だと。しかも、職人は亡くなつていても同じ物は作られない。この値段でも、決して法外な設定ではないですよ」

ああ、こりゃ駄目だ。買えそうにない。仕方がなしに、俺は人形をメンテナンスに出してもらい、戻ってくる前にバイトを辞めるという決断を下すことにした。さらば人形屋、仕事も店の雰囲気も、結構好きになつてたぜ。

「と言いたいところですが……ある条件を結んでくれれば、ここまで割引をしますよ」

お世話になりましたと頭を下げようとした時、店長がもう一枚短冊を取り出して何かを書き込むと、俺に見せてきた。六割引き? いきなり下げすぎじゃないのか?

「あの、よくある悪徳商法の最初に嘘の値段を言って、それから割引と称して正規の値段

を教えて安いと錯覚させる手法ではないです……よね？」

「失敬な。私はそこまでがめつくはありませんよ。それに伊達くんもここで働いて、観用少女の質と値段はなんとなく理解しているでしょう」

「まあ、少しだけですが。でも、いきなり半額以下まで下げられたら警戒もしますよ」

「確かに。でも、それぐらい下げても構わないくらいなんですよ、私には。そして肝心の条件ですが、簡単なことです。伊達くんが大学を卒業したら、当店に正社員として入ってくれること。それだけです、いかがでしょう？」

え、本当にそれだけ？

俺に全然デメリツト無いんだけど、いいのか。

「不思議そうな顔をしていますね。実を言いますと『眠っている少女へミルクを飲ませる』という作業は、誰にでもできるわけではないんです。起こさない程度に目覚めさせるというのは、ある意味矛盾している行動ですから、特殊な波長とでも言えばいいんですかね、そういうものが必要なのですよ。だからこそ、望月が伊達くんを選んだのかもしれないですが」

「それと、望月ぐらいいになると人を選びすぎて、なかなか持ち主が決まってくれないのですよ。観用少女は眠っていてもミルクや入浴、着替えが必要ですから、居られるだけ費用もかかる。なので、私としては多少安くしても売れてくれた方がありがたいのです

よ。ドレスやミルク代で稼げますしね」

因みに面接で使った観用少女は、あの時店に置いてあったモノの中で一番高くて、気難し屋だったんです、とついでのようにネタバラシもされた。

ここまで言われて、俺の心はぐらついていた。正直にいうと、俺がいる学科はそれほど就活に有利ではない。俺自身、就職先はどこかの飲食店の店員か、営業だろうと考えていたくらいだ。それが人形屋。まあ、正社員になれば任される仕事は増えるだろうが、店長の働きぶりをみる限りは、時間に追われてセカセカするような事はなさそうだが、客層もおだやかな人が多そうだから、ちよつとしたことでクレームや怒鳴られたりする可能性も低そうだし。

だが、六割引とはいえ、ゼロはまだ七つづついている。新卒の給料で何とか出来るだろうか。

「あ、初任給ですが、総支給額でこれくらいでどうでしょう?」

「ローン組みます店長これからもどうぞよろしくお願いします!!」

これして俺は長期のローンを組むことよって、人形と就職先を一気にゲットすることとなる。この時俺は想像もしていなかった。その後遊びにきた友人・蒲生に勘違いされた結果、大学の知人全員にロリコンのレットルを貼られる羽目になることなど。

高い買い物をした際の取説

店に届いた望月を早々に目覚めさせて購入を決定した俺は、望月を伴って商談用の部屋へとやってきた。そういうえばここ、入るのはバイトの面接以来だな。

「観用少女のご購入、ありがとうございますございます伊達君。少女を目覚めさせたお客様には、彼女らについて軽く説明させてもらいますが、伊達君には今後店員になつてもらいますので、もう少し詳しい話をします」

「は、はあ」

「ああ、そこまで緊張しなくても大丈夫ですよ。それほど難しい話ではありませんし、いきなりお客様の相手をしろなんて事もさせませんし。観用少女の扱いについて、通常のお客様より少しばかり込み入った話をするので、それを頭の片隅にでも覚えてもらえば、程度の気持ちで充分です」

固まっている俺に、店長はクスリと微笑むと「では」と説明に入った。

「まず、観用少女の世話自体については、それほど手間ではありません。風呂やトイレ、着替え等はすでに覚えていきますから。なので、世話として主にやることと言えば、日に三回のミルクの温めです」

「世話の話だけに絞れば、観用少女の扱いはそれ程難しいものではないでしょう。しかし、彼女らの体調を維持するには『愛情』が必須になります。これが、なかなか大変になります」

店長の言う通り、買ってから少女の具合が良くないと相談にくる持ち主はそれなりにいる。

「愛情が足りなくなると、どんな変化が起きるんですか」

「最初に気づく異変としては髪艶が無くなってきた、肌の質が悪くなってきた、の二種類ですね。この時点なら、補助栄養剤として専用の砂糖菓子をミルクと共に与えながら愛情を注いでやれば直ぐに改善されるでしょう。放置しておく、ミルクを残したり飲まなくなってきました。ここまできた場合はメンテナンスが必要です。観用少女のメンテナンスは、アフターサービスとして無償で行っておりますが、愛情不足からくるメンテナンス時はお客様責任ということで、有償となります」

「だいたいこのくらいですね、と短冊に表示された金額は相変わらずエグかった。怖、絶対大事にしよう。」

「ここまでが、観用少女を助けられるギリギリのラインですね。これ以上放置しておく」と

「……しておく……」

「『枯れ』ます」

また穏やかじゃない単語が出てきたな。しかし枯れるって……ミイラみたいになるのか？ 完全にホラーじゃないか。

「『枯れる』というのは便宜上の意味で、実際は消滅ですよ。愛情不足が極まると、少女たちは僅かな灰を残して消えてしまいます。因みに少女に暴力を振るおうとして、『枯れる』事もあります。強いストレスを与えれば枯れる、とでも覚えていて下さい」

つまり、観用少女はとにかく可愛がれ、虐待なんでもつての他というわけか。

改めて大事にしようと誓って、隣にいる望月へ視線を移せば、店長をじつと見つめている。真面目に話を聞いている風だったが、視線に気づくとすぐさま俺を見つめてきたので、急いで視線を反らす。まだ買って時間が経ってないのもあるが、綺麗な顔した子に見つめられるって恥ずかしいというか、照れるというか……慣れないな。

しかし、そんなこととして望月のストレスの元になったらヤバいので、顔を付き合わせるのには早めに慣れないと。

「とりあえず、望月の様子は日々しっかり確認した方がいってことですな」

「そうです、変化に気付くのも愛情の一つと言えるでしょう。あと気を付けることは……まあ伊達君はこれから正式な店員になるのでやらないとは思いますが、観用少女には絶対に『決められた物』以外は与えないで下さい」

「ええ、そのつもりですけど……いるんですか、ミルク以外を与える人が」

「割といらっしゃるのですよ『少女が興味深そうに見ていたのでつい』という方が。本人も、一枚のクッキーや一口のジュース程度のつもりでいるので、それほど大事にはならないと考えているのでしようね」

「与えるとうなるんですか」

「まずは高確率で倒れて、メンテナンスが必要になります。この場合も、お客様責任ということで有償になりますので。次の可能性は『枯れる』事になります。これは少女にとつてあまりにも刺激の強いもの……酒や煙草類が当てはまりますかね。一瞬で『枯れ』てしまうのでご注意を」

「……超気を付けます」

「実際は欲しがっているわけではなく、ただ持ち主の行動を眺めているだけなので、気にしないのが一番ですよ。そして、先程の話に戻しますが……低確率で『育ち』ます」

「育つ?」

「観用少女の名前の通り、彼女たちの見た目は少女のまま、固定されています。毎日ミルクを飲んでも成長は一切しません、その内に解ると思いますが、髪の毛すら伸びませんからね。髪型を変えたいというお客様がいらっしゃったら、特殊な合成肥料をお渡しすることになりますし」

言いながら柵から取り出したのは、トリートメント材のようなもの。これを入浴時に髪に塗って、成長を促すんだとか。

「『育つ』……という事は大人になるって解釈でいいんでしょうか？」

「はい、しかしどう育つかは少女によつて異なりますので定義はありません。特殊過ぎる事例がほほないので、私も育つた観用少女は噂で一度聴いただけです。それだけ少女が育つのは珍しく難しい」

「難しい……？」

「育ちきるまで倒れず枯れずの状態で、人の食べ物を長期間与え続けなくてですから。少しでも用量を間違えれば、メンテナンスが枯れてしまいますし。狙つてやるとしてもかなりの根気と運がないとなんです。そして、大人になったからといって理想の美女になるかは解りませんからね。育ちきつたらメンテナンスは出来ませんし、返品も不可ですよ」

つまりは、危険を犯してまでやる価値が無いと。確かに、美少女が微笑んでくれるだけで充分だもんな。

「と、色々説明をしましたが、気負わずに可愛がつてあげるだけで問題ないですよ。少女たちも持ち主を選んで目覚めますから、特別相性が悪いこともないでしょう」

「うい、解らない事があれば店長に訊くので、その時はよろしくお願いします」

「そうして下さい。大切に扱えば望月は『銘』付きです。ひよつとしたら、天国の涙が手に入るかもしれないですよ」

「何ですか、それ」

「ああ、言つてませんでしたか。天国の涙というのは宝石の一種で——」

その後、客がくるまでの数時間、店長から観用少女についての細かい説明や、正社員として今後覚える仕事内容等を教えてもらった。

望月も俺が話を聞いている間、ずっと傍にいたが……果たして意味を理解して聞いているのか謎である。

高い買い物をした後の日常

布団越しから軽く揺さぶられて、俺の意識は覚醒した。今日は土曜日、折角だからもう少し寝ていたんだが、俺の願いなど知ったこつちやないと揺さぶりは止まることがない。仕方がない、起きるとするか。

「お早う、望月」

身体を起こして挨拶をすれば、先日俺が買った最高級観用少女・望月は、小さく頷いて布団を剥がしてキッチンの方へと歩いていく。そのまま大きく伸びをして眠気を追いつけていると、瑠璃色のマグカップを両手で大事そうに抱えた望月が戻ってきた。早く食事にしようということらしい。

「ハイハイ、少し待っててくれな」

キッチンへと向かい、冷蔵庫を開けて観用少女用のミルクを取り出す。余談になるがマグカップもミルクも、結構な値段だったりする。望月を購入するに辺り店長から色々とおマケしてもらい、このマグカップもそのおマケの一つなので金は払っていないのだが、正規の値段を聞いたときは真顔になってしまった。とにかく、観用少女に関する品は総じて高い。深く考えもせずにはいよいよ買っていけば、必ず庶民は破産するだろう。

何でこんなに高額なのかという、良い素材を使った職人の手作り、というのもあるが、観用少女に必須な『愛情』が関係している。簡単に言ってしまうえば高い物を与えるに愛されているという事になり、管理が楽になるのだ。逆を言えば手間暇をかけてやれば、市販の物でも充分やっていけるといことになる。俺のようなはその辺の調整をうまくやって、金のやりくりをしろということだろう。

大きな欠伸をしながら、ミルクを鍋に注いで弱火で温め、その間に俺の朝食の準備もしておく。とはいっても卵やウインナーを焼いたり、レタスやプチマトの簡単なサラダを作るぐらいだが。前は食事なんて作らなかつたんだが、望月にミルクを飲ませていたら『お前も一緒に食事しろ』と無言の訴えを受けたので以来こうやって作っている。財布と健康には良いんじゃないだろうか。

食事を盛り付けてからミルクをマグカップに移し、残りのミルクは魔法瓶に保存してからテーブルにつく。向かい合うよう座って手を合わせれば、望月はマグカップを持ち上げてグイッと一気に飲み干す。この辺は少女によって個性が出る。ゆっくりと時間をかけて飲み干す少女もいれば、一口飲む毎に長い息を吐く少女等。

望月は結構豪快な部類に入ると思う。高い割には、その辺はお淑やかではないのが少し不思議だ。

そして飲み干してから見せるのが、例の極上の笑み。初めは満面の笑みを想像してい

たのだが、望月は口元を微かに上げて笑う程度だ。これも少女によって違うらしい。もつと思いつきり笑つて欲しかったが、これはこれで可愛らしいので問題ない。

朝食を終えたら昼になるまで、その場で課題を纏めたりと静かに過ごす。望月も買った小説や、録画していたドラマやアニメなどを見て大人しくしている。しばらくするとスマホが震えたので見てみれば、相手は友人の蒲生。遅番のバイトが終わつてこれから帰るついでに、俺のマンションに寄つて週明けに提出する課題を見せて欲しいとのこと。この時間に来るとなると昼飯と重なるが、文には土産を持つて行くと書いてあるので用意してやるでしょう。

冷凍うどんを煮ていると、再び蒲生から連絡が来たので下まで迎えに行く。今は以前の安アパートではなく、セキュリティ完備のマンションに住んでいる。金に余裕が出来るものもあるが、観用少女を所有していることで金を持つていると思われて空き巣に入られるのを防ぐためだ。金目の物がなければ、ならばと望月を持ち出そうとするかもしれない。ローンを終えてないのに肝心の望月がないなんてなったら、残りの人生泣いて暮らす羽目になるぞ。

「望月ちゃん久しぶり。今日はミルクを持つてきたよー!」

部屋に入るなり、蒲生は頬をだらしなく緩めながら鞆から数本のミルクを取り出して、望月へ捧げるように差し出してきた。望月の方も馴れた様子で当然のようにミルク

を貰うと、さっさと冷蔵庫へとしまっていく。

俺のことをロリコン呼ばわりしていた蒲生だが、望月を見るなり「綺麗だ!!」と叫んで以降こうやってやってきては、観用少女の必需品や嗜好品を買ってくる下僕となっている。いや、蒲生だけじゃない、俺の知り合い全員が望月を見るなりその可憐さの虜となつて、望月のATMとなつていた。正直、俺よりもコイツらの方がロリコンっぽいと思うのだが、全員来る度に望月の為に何かを持つてくるので、黙っていることにしている。コイツらが買いでくれるから、助かっている面もあるしな。

「蒲生、そんなに観用少女が気に入ったんなら店に来て自分用の買ったらどうだ？ 絶対見つかる保証はしないけど、俺の紹介つてことで多少は安くできるぜ」

「何言つてんだ伊達！ 俺は人形が欲しいんじゃない。望月ちゃんだからいいんだ！ 望月ちゃん以外の人形なんてどうでもいい！」

キリリとした顔で、ハツキリと「望月以外に興味はない」と宣言された。蒲生は頭もいいし、顔も整っている。内定もかなりいい所が早々に決まって、女子が結構騒いでいるんだが……今の奴を見たらどう思うだろう。やはりイケメン無罪が適用され、観用少女だからノーカンで許されるんだろうか、羨ましい。

「解つた。じゃ、これレポートな。飯も食つてくださる？」

「ああ、悪いな」

「気にするな、望月のミルク買ってきてもらつたしな。そろそろ無くなると思つてたから助かった」

「任せろ、俺がいる限り望月ちゃんに悲しい思いは絶対させやしない!」

レポートを写し、一時間ほど望月を激写してから、蒲生は帰つていった。その後、溜まつた家事をこなしてから、夕飯の準備をするべく冷蔵庫を開けるが、想像していたより食材が心許なくなっている。買ってくるか、もう少ししたらタイムセール始まる筈だし。

財布を手にして玄関へと向かうと、望月が後ろに並んでついでこようとしたので、慌てて引き剥がした。

「さて望月、これから行くのは人形屋じゃなくてスーパーだ! お前がついてきたら俺また職質受ける羽目になるだろ、だから大人しく待つてろ!!」

そう、以前深く考えないでスーパーに望月と買物に行つたら、不審者と間違えられて警察に呼び止められてしまったのだ。確かに、高そうな服を着た飛び抜けて綺麗な女の子を、その辺にいそうな大学生が連れて歩いていたら誘拐犯と疑われても仕方がない気がする。しかもあの時、望月が手を出してきたから普通に手を繋いでいたしな。周りから見れば、さぞかし不釣り合いな組み合わせに見えただろう。

「解るだろ望月。またあんな目にあいたくないんだ。だから留守番を頼む」

手を合わせて頼み込めば、恨めしげな顔で見上げてくる望月。控えめに裾をそつと握ってくる様が、何ともいじらしい。美人てのは、怒ったり拗ねたりした顔すら様になるのだから得だと改めて思う。その顔について「仕方がないな」と言いたくなるが、グツと堪える。もう、職質された時の警察官の「本当に観用少女なのか？ お前のような冴えない学生に買えるものなのか？」という胡乱な視線を向けられるのももうコリゴリだからな！

土産を買ってくるからと言ってようやく納得してもらえた俺は、急いでスーパーに向かい必要最低限の買い物をすませる。さて、土産を約束したものの何を買えばいいのやら。子供なら甘いものが定番なんだろうが、観用少女はミルクと人形屋で売られている専用の砂糖菓子以外は食べさせられないからな。

「……………あ」

悩んでいた時、スーパー内に設置されている本屋が目に入った。そういえば、望月は本が好きだな。どこまで字が読めるかは解らないが、人形屋に売られている絵本から俺が持っているミステリやホラー小説まで、何でも手をつけている。さつき丁度手にしていた本を読み終えたみたいだし、本を土産にするか。

そのまま本屋に入って、良さそうなのがあるかと探していたら俺が好き作家の新刊が置かれていた。望月が読んでいたシリーズもこれだし、これにしよう。

ラッピングをしてもらってから望月に渡せば、ミルクを飲み終えた時のような笑みを
見せてくれた。高額な物ではないが、お気に召してくれたようだ。

その後、夕飯を食べてから望月が本を抱えて読んでくれと訴えてきたので朗読したの
だが。

「雪江の絶叫が辺りに響き渡る。なあ……これ読んで楽しいか？」

真剣に聞いてくれていたが、殺人シーンを読み聞かせるのはどうなんだろう。

（次からは普通に絵本とかの、平和な内容の物にしよう）

早く続きを読めと袖を引っ張ってくる望月を見ながら、俺は固く決意したのだった。

高い買い物をする前からの趣味

『はい、それでは右耳の方から搔いていきますね。肩に力を入れないで、リラックスして下さい』

「ふわああ〜」

ノートパソコンからヘッドフォンを繋いで、俺は机の上に突っ伏していた。両目を閉じ、声から状況を妄想する。思い浮かべるのは、形のいい手に握られた耳搔きが、音にそって搔いてくれる様だ。当然、耳なんか搔かれてはいないんだが、聞こえてくる音があんまりにもリアルなもんだから、実は耳搔きされているんじゃないかと錯覚しかける。

『此方は綺麗になりましたよ。では、反対側を向いて下さい。あ、でもその前に……』

「〜〜〜」

フウーと息を吹き掛けられる音に、背筋がゾワゾワした。耳元もくすぐつたい。リアルな音って、本当に脳が騙されるんだな。

目を閉じたまま身悶えていたら、ユサユサと肩を揺さぶられた。目を開けて顔を上げれば、いたのは望月。アレ、先に寝てたんじゃないのか？

「どうした、望月。眠れないのか？」

訊ねれば、望月はパソコンを指差しながら俺の顔をじつと見ている。まるで「消し忘れている」と言っているようだ。

「ああ、これな。これはASMRって言つて音を楽しむ物なんだ。今見てるのは耳掻きロールプレイだから、見てもそこそこ面白いけれど」

説明を試みるも今一理解していないらしく、不思議そうな顔で首を傾げる。ついでだ、耳掻きについて教えてみるか。

「耳つてのは解るか？ コレな。そして、耳掻きつてのは耳の穴の中を掃除する事をいうんだ。掃除する道具は色々あるけれど、俺は耳掻き棒が一番好きだ。ああ、耳掻きつてはこれだぞ」

俺の隣を軽く叩けば、望月はペタンと傍に来て座る。まず見せたのは、ペン立てに入れている耳掻き。コイツはつげの木で職人が手作りした品で、薬局というよりは百貨店なんか売っているような高級品だ。かき心地は……まあ悪くはないんじゃないかと思う。こういうのは、素材の良さだけではなく使い手の技術もあるだろうから。

差し出した耳掻きを望月は、しげしげと眺めた後そつと手を伸ばしてきたので、望みに通りに渡してやればギュツと握りこんでから穴があくほど真剣に見つめ出す。ううん、そんなに興味を引くような形をしているだろうかコレ。

「で、この映像がその耳掻き行為な」

少し考えた後、俺は検索をかけてどっかの実況者がかの有名な膝枕耳掻き店のレポートをする動画を再生させて望月に見せた。耳掃除そのものの動画を見せるという考えもあつたんだが、アレは見方によってはグロ画像に分類されるので止めておく。

膝枕からの目隠し、耳ツボ押しからの耳掻きの一連の作業を見せると、またしても望月は食い入るようにして画面を見つめ出す。観用少女にも色々と趣味があるが、望月はこうやって何かを観るのが好きなようだ。

声を出さないから正確な知能などは解らないが、ドラマも一話完結ものだけではなく連続する話も普通に観ているので、流し観ではなくある程度は内容をキチンと理解しているのだろう。

そのまま終わりまで動画を観終えると、寝るのにはちょうどいい時間になった。「今日はもう終わりな」と言えば、望月は大人しく引き下がり自分の布団へと戻っていく。この時は、耳掻きへの興味はこれで終わりだとおもっていたのだが。

あれから五日。望月は今日も飽きる様子もなく、耳掻き棒を握りしめながら動画を眺めていた。観るのも前回のレポートや紹介系のものから、耳の内部の掃除動画と色々

だ。よほど気に入ったらしい、まあ俺も好きだけんどさ。

と、夢中になっている望月を微笑ましく思いながら食器を洗い、片付けが終わってからASMRを楽しもうと考えていたら、グイグイとエプロンの紐を引つ張られた。ん？と振り替えれば、耳掻きを握りしめたままの望月が。俺と視線が合うと、望月は正座してペシペシと太ももを叩く。んん？

「どうした？」

意図が解らず問いかければ、もう一度ももを叩いて耳掻きを見せてきた。これはつまり……耳掻きをしてやるってことか？

思わぬ申し出に、俺は心のなかで唸る。正直に言えば、鼓膜が心配でたまらない。何しろ望月は耳掻き初心者だ、いくら動画を観ていたからってやったことは一度もない、そんな相手にやすやすと耳を預けるなど、かなりの博打になるのだが。

望月は、キラキラと瞳を輝かせて俺を覗いていた。眩しい、可愛い！ これを無視するのは別の意味できつい。長い逡巡の結果、結局。

「……耳垢があつても奥まで耳掻きは入れないで、俺がストップと言ったら必ず耳掻きを抜く。約束してくれ」

肩を掴み、しっかりと目線を合わせて懇願すれば、しっかりと頷いてくれた。これで、鼓膜を破られるという危険はかなり下がっただろう。

「じゃあ、頼むな」

優しく肩を叩いてから、望月の膝に頭を預ける。一応動画の通り、身体は望月に対して垂直になるようにした。寝転がれば、早速眼の位置にガーゼのハンカチを置かれる。やっぱり動画を参考にしているようだな。となると、直ぐに耳掻きには入らないか。次は何をするんだっけ。

ボートと待っていると耳朶に指先が触れてきて、そのままムニムニと弄られる。これは……マツサージなんだろうな。ただ、適当に揉まれたり引つ張られたりしているだけなのに、結構気持ちがいい。

(あゝ、これだけでも悪くないな)

少し冷たい望月の細い指がたどたどしい動きで耳朶に触れているというのが、またいい。蒲生たちに言えば、アイツら絶対歯ぎしりする勢いで羨ましがらるだろうな。

時間にして数分の間マツサージを堪能すると、両手がパツと耳朶から離れた。いよいよ耳掻きかと僅かに身構えていたら、耳掻き棒のさじが触れてきたのは同じく耳たぶ。そのまま溝の中に入り込むとカリカリと動いて、汚れを取っていく。

こんなの動画にあったつくと疑問が浮かぶが、望月は手当たり次第耳掻き動画を漁っていたからその中であつたのかもしれない。とりあえず感想はアレだ。これはこれで良し！

ほう、と自然に息が漏れる。耳掻きは何度も溝の間を往き来し、その都度抜かれる。ひよつとしたらかなり汚れているんだろうか。汚い箇所を望月に見られていると思うと少し恥ずかしくなるものの、耳掃除っていうのはそういうものだしなあ、と思い直す。それに動画を見ていたのだから、耳はある程度汚れているものだとは理解しているだろうし。

「んっ！」

目を閉じて完全にリラックスしていたら、いつの間にか耳たぶの掃除は終わったらしい。溝から抜かれた耳掻き棒が、穴に侵入してきたので、思わず声が出ってしまった。身体を動かすのは流石にこらえたが。すると、直ぐに耳掻きが抜かれ、目元を覆っていたガーゼのハンカチを捲られる。覗きこむ望月の表情は不安気だ、さっきアレだけ念を押したから心配させてしまったかもしれない。

「大丈夫だ。あんまりにも望月がしてくれたマッサージュが気持ちよかったから、ちよつとビツクリしただけだから。痛くないから、そのまま続けてくれ」

安心させられるように、出来るだけ優しい声で言えば望月も問題ないと判断したようだった。コクリと頷いてから、再びガーゼのハンカチが目元にかけられる。そして穴の中に入り込んでくる耳掻き棒だが、今回は解っているので驚くことはない。中ほどまでにやってくるカリカリ、サリサリと掻かれる。掻く強さは少し弱いくらい、といった

ところか。強すぎて痛いということもなければ物足りないということもない、絶妙な加減だ。

カリカリ、カリカリとアチコチの壁を搔かれる。音に変化が無いから、大物はないのかと思っていたが突然ガサリ、という大きな音が聞こえた。お、と思っていると望月も気づいたらしい。また耳搔き棒が抜かれ、耳たぶを引つ張られて覗き込まれる気配がする。

大体の位置が解つたのだろうか、ソロリソロリと慎重に耳搔き棒が入り込んできた。先程とは違う様子に、駄目だと解つても身体に力が入ってしまう。中よりも少し奥にきたところでガサリと、また大きな音がした。すると、望月はさじの部分で耳壁に押し付けたままの状態でも耳搔き棒を動かし始めた。少しずつ動かして、耳垢を引きずるようになって外へと持つていく。その間ずっとガサガサ・ゴソゴソと音が響くのでむず痒い感覚になってくる。数cmにも満たない耳の中が随分と長く感じられていると、やがてポロリと異物が外に落ちる音と共に耳搔き棒が出ていった。

どれくらいの大物がとれたのかと想像していると、ガーゼのハンカチが外され目の前にさじが突き出される。音の割りには小さく思えるが、あの細い耳のなかに入っていたことを考慮すれば、そこそこの大物なんじゃなからうか。見せてくる望月の表情もどこか嬉しげだ。やっぱり誰でも、凄いのがとれるとはしゃぐもんなんだな。

仕上りに膝枕耳搔きお約束(?)の、息を吹き掛けて掃除は終了だ。頭を上げてから礼を言えば、満足げな顔をしながらもう一度膝を叩く望月。ちゃんと両耳やつてくれるようだ。

反対側を向けて頭を預ければ、またマツサージから始まる。耳たぶを柔らかく揉まれていると、だんだんと眠たくなってきた。さつきまでの耳掃除で、望月の腕前は把握できたから……ちよつととうとうとさせてもらおうか。

「望月。俺ちよつと寝させてもらおうからさ、終わったら起こしてもらえるか?」

頼めば、了解といった感じで、頭を軽く撫でられる。見た目小学生くらいに甘やかさせるのもどうなんだと一瞬考えたが、誰にも見られているわけでもないからいいや。

納得すれば、一気に眠気がやってくる。ふあと大きく欠伸をしてから、俺はそのまま目を閉じて夢の世界へと旅立っていった。

高い買い物が出来ないので、その分手間をかけることにした

耳搔き棒が抜かれ、フウと息を吹き掛けられる。頭を軽く撫でられれば、終了の合図だ。

「いやー、今日も気持ちよかつたぞ。ありがとな、望月」

横になっていた身体を起こして礼を言えば、望月は頷いてから微笑んでみせる。あれから一ヶ月。すっかり耳搔き（をやる方）の虜になった望月によって、俺は定期的に耳搔きをしてもらうことになっていた。とはいえ、毎日ではできないので二週間に一度のお楽しみになっているが。

それにしても、まだ三回ほどしかやっていないのに、やるたびに耳搔き技術が上がっていつている。気持ちよすぎて意識が飛んでいってしまうレベルだ。正直、金をとれる腕前だと確信している。蒲生たちだったら、言い値でも即払いそうだ。アイツら、完全に望月の財布と化しているからな。

大きく伸びてから立ち上がるうとした時、肩に手を置かれた。何だと疑問に思うまもなく、今度は両肩を揉まれる。

「あゝゝゝ」

オツサンみたいな声が出たが、そんな声が出てしまうのも仕方がないくらい、望月の肩もみは絶品だった。自覚は無かったが、俺の肩はそれなりに凝っていたらしい。ギョツギョツと揉まれる度に、じんわりとした温かさで快感が、肩から背中全体へと広がっていく。

肩を揉まれて血行がよくなったと分かるほどに背中がポカポカとしてくると、手が首にやってきてグイーツと押される。うわーこれも効くな、観用「少女」と言われるだけあって望月は小柄な方だが、全体重をかけているかグイグイ押しされる度に痛気持ちよさがやってきた。耳搔き同様されるがままになつていると、やがて指は背骨にそつてグイーツグイーツとゆつくりと降りてくる。指は腰の辺りまできてから、またグイーツグイーツと押しながら上に戻ってきた。その後は、美容室や床屋なんかでやってくれる両手を合わせた状態でパチパチと肩を叩かれ、背中を摩られる。これで終わりか？

「はあああゝゝゝ」

望月が離れると同時に、気の抜けた声を上げながら近くにあるテーブルに突つ伏す。駄目だ、望月の技術が凄すぎて身体がぐにやんぐにやんになつていゝ。もはや何もする気が起きない。みんな終わらせて寝るだけにしておいて本当によかつた、この状態じゃ動くのも億劫だ。

くったりしたまま視線だけを望月に向けると、気づいた望月が此方を見る。若干ドヤ顔をしていて、なんか「計算通り」って声が聞こえてくる気がしないでもない。

(これは次回から耳掻きとマツサージのセットになるな)

あまり働いていない頭で、そんな事を考える。勿論悪いことではなく、俺としては楽の時間が増えるので、とても喜ばしいことだ。

だが、その一方でこうも思う。ここまでしてもらう以上、こつちも何か返してやらな
いとだな、と。

何を望月に贈ろうかと悩みながら、ページを捲る。眺めているのは、観用少女の服を紹介している項目。店長にドレスの仕入れを頼まれたので、それついでに探しているというわけだ。

「うーむ」

悩みながら、またページを捲る。服はフリルや刺繍、モノによつてはスパンコールやスワロフスキー? とかいうキラキラした石がふんだんに使われていて、多分女性なら一度は憧れるような作りになんじやないだろうか。というか相変わらずゼロの数おかししいし、これ服じゃなくてドレスなんじやないか?

それにしても、望月はどんな服が好みだろう。観用少女つてのは結構好き嫌いが激しくて、自分の興味が無いものには手にとつてくれない。例えそれが、持ち主が観用少女の為に必死に悩んだ末、選んだ物だとしてもだ。

だから、この服選びも意外に重要だったりする。紹介されている服を適当に見繕つて注文すれば、見向きもしてくれないのだ。さつきも言つたように、彼女らの服はゼロの数が多いので、間違えると大きな損失になってしまう。

あ、これ望月に合うんじゃないだろうか、でも赤系の服は着たことないんだよな、何時もの青や紫系が多いから、好みじゃないかもしれない。値段考えると、挑戦するのはちよつと怖いかな。お、ならこつちの明るい青緑のはどうかって高いなおい！ 流石に手が出せないわ。

「はああああ」

結局、服に関しては顔を青くするだけで選ぶことが出来なかつた。悪い、まだしばらくは着回して我慢してくれと、心の中で謝罪しながら、もう一度最初ページから眺め始める。基本的に観用少女は女の子らしい可愛い服を好むから、この黄色と白のワンピースを頼んでおくか。暖色系をメインに、たまに寒色系を挟んで候補を上げていく。とりあえず十着程選び、付箋を張り付けておくと、まるでタイミングを見計らつたかのよう

に店長がやってきた。

「伊達君、お疲れ様です。此方も商談が終了しましたので、少し休憩にしませんか」

「ああ、いいですね。じゃあ俺がお茶をいれますよ」

「おや、すみません。それでは、座って待たせてもらいます」

軽く頭を下げてから、椅子を引いて腰かける店長。入れ替わるよう俺が立ち上がり、棚を開けて茶葉と道具一式を取り出して準備をする。俺も正式な店員になれば、こうやって茶を出しながら観用少女の契約やら相談をすることになるので、ちよつとした練習というわけだ。せめてお茶くらいは、うまいものをいれられるようにしておきたい。

「お待たせしました。まだ店長ほど上手くはないですが、どうぞ」

「ありがとうございます。フフフ、その内伊達君もコツをつかんで、美味しくいれられるようになりますよ。若い人は覚えがいいですからね」

向かい合う形で座って、互いに長い息を吐く。一息できる時間がしつかりとれるのはありがたい、いい職場に就職できる事に感謝しながら、店長と仕事のことやそれ以外の日常のことなど、とりとめない会話をしながらお茶をすすった。

「そうだ店長。今度仕入れる服をリストアップしてみたんですけれど、こんな感じでどうでしょう」

「拝見しましょう。ふむ、これなら売れ残りも出ませんね、いい選択だと思えます」

店長からお墨付きを貰えたので、ホッと胸を撫で下ろす。その後、更にこうした方が

いい等の細かいアドバイスをもらったのでメモをとりながら頭の中に叩き込む。観用少女の好みは、作る職人の好みが反映されるから、職人の好みを覚えておくと楽か、参考になったぜ。

「あ、店長。仕事じゃないんですが、ちょっと相談が」

「はい。どうしましたか」

休憩ついでに、俺は最近の望月の行動について話し、礼として何かしてやりたいがどんなのがいいかと訊ねてみる。勿論、出来るだけ金がかからない方法があれば助かるに加えて。

「でしたら、これはどうです?」

店長が、ページを捲つてある商品を指したので、つられるように覗き込む。

「値段は……伊達君の予算の範疇に収まっているかは分かりませんが、衣装に比べれば安上がりですし、壊れさえしなければ一生使える物なので元はとれると思いますよ。それに、耳掻きのお礼としてやってあげれば、望月も只貰うよりもずっと喜ぶでしょう」
成る程、耳掻きのお返しにやる。確かに悪くない手段だ、それほど難しいものじゃないしな。毎日なら少し手間だが、たまにやるくらいなら悪くない。

「しかし、耳掻きとマツサージをするなんて。望月はよほど伊達君の事を好いているんですね」

「へ、そうなんですか？」

「ええ。観用少女というのは、基本的に受け身です。『愛される』前提で作られていますからだいたいは大人しく待ち、持ち主から愛情を注がれるのを待つて、望んでいた物を出されて笑顔で応える。それが彼女らの在り方なんです。自分からやり方を覚えて、それを実践するというのは、なかなかやらないですよ。持ち主を喜ばせようと努力するなんて、健気じゃないですか。大事にしてあげて下さい」

へえ、そうだったのか。今度蒲生たちに自慢するとしよう。

そんな事を考えながら、服と一緒に店長が勧めてくれた物も一緒に注文しておく。届くのは一週間後だとか、届くのが楽しみだ。

グリグリと首の付け根を親指で押されて、気持ちよさに吐息がこぼれる。まだマツサージは二回目だったのに、なんでこんなに上達しているのか、動画見るだけで技術が身に付くなんて凄すぎじゃないか？ 羨ましい。

そして、ポンポンと両手で肩を叩かれてマツサージは終了。礼を言えばコクコクと頷く望月。そのまま立ち上がって布団の方へ向かおうとするので、名前を呼んで呼び止める。振り返ってジッと見つめてくる望月に「俺からもお返し」と先日届いた例の品が

入っている箱を開けた。

入っていたのは櫛、相変わらずおかしき値段設定だが、観用少女の髪質と艶を維持するにはこの櫛がいいんだとか。確かに、観用少女の髪の毛ってサラサラでツヤツヤだからな。

「耳搔きとマツサージが絶品だったから、お礼。毎日使ってくださいよ」

手渡せば一瞬だが、望月の金の瞳の輝きが増した、気がした。両手で受け取り微笑むと、直ぐに俺の方へと突き出してくる。ああ、やってくれつつも、お安いご用だ。

「よし、じゃそっち向いてくれ。梳かすだけでいいよな？俺、女の子の髪なんて弄ったことないから、凝った髪型なんて作ってやれないし」

促せば、背中を向けながらもチラチラと喜びと期待に満ちた視線を飛ばしてくる望月。これは俺も動画を見て、髪型の勉強をした方がいいかもな。

とりあえず今回は、髪を軽く梳かして終りにさせてもらった。それから、耳搔きとマツサージの後には、お返しの手入れとセットというルーチンが組み込まれることになる。

ちよつとだけ高い買い物をする

春。無事に大学を卒業した俺は、晴れて観用少女店の正式な店員になることが出来た。

本当は地元に戻って就職したかったのだが、地元じゃこれぐらい条件のいい職場なんてそうお目にかかれるモノじゃないから、欲張らないでおこう。

まあ同じ県内で、電車を使えば一時間ちよつとで帰れる事を考えれば、地元のくくりに入れても問題ないか？

家族にも地元には戻らずに大学側の方で就職すること、就職先は観用少女の店ということ伝えてたら随分と驚かれたけれど、給料の良さを言ったら良いところに就職出来て良かったと非常に喜ばれた。

きつかけになった望月の事も話せば、そんなに綺麗な人形なら一度見てみたいから、休みの時にでも連れてきてくれと頼まれたのだが、それについては曖昧に答えるだけで終わらせる。正直、望月を電車で一時間近く乗せた場合、どんなハプニングが起きるか検討もつかないし、対応できる自信がない。連れていくなら車に乗せて行った方が安全だが、俺はまだ自分の車を持っていない。幾ら新卒の割に給料がいいとはいえ、望月の

ローンに車のローンを加えたら生活が出来なくなってしまう。レンタルで借りるにしろ、お披露目は当分先になりそうだ。

そんな事がありつつも、正社員になって三週間。仕事に向かう準備を整えた俺は、望月に話しかける。

「望月、これから仕事に行くけれど、今日はどうする？」

問うと、望月はじつと俺の顔を見つめてから両手で抱えているタブレットを眺めた。コイツは、動画を見るとノートパソコンを占拠されてしまうので、それを防ぐためにリサイクルショップで買ってきた物だ。安かった分少々古くさいが、動画を見るには充分機能しているので不満は持たれていない模様。

タブレットをしばらく眺めた後、望月は首をユルユルと振った。どうやら、今日は一日動画を見て過ごしたいようだ。

「そっか。じゃあ昼休憩に戻ってくるから、それまでいい子にしてくれよ」

整えられた髪型を崩さないよう注意しながら頭を撫でれば、望月は頷いてからタブレットを抱えて部屋へ戻っていく。

今観てるのはそんなに気に入ったか。何観てるんだらうな。コメディ、ホラー、恋愛、推理……どれも満遍なく観てる様子だからな。見当もつかないぜ。

そんな訳で今日は、一人で歩いて店までやってきた。前の安アパートよりは距離があるが、それでも歩いて十分ちよいで着くのは、充分近い距離になるだろう。いい職場だよ本当に。

渡された鍵で扉を開けて中に入り、掃除用具を手にして開店の準備を始めていたら、階段から店長が一人の観用少女を伴って降りてきた。

この店の上にはベッドが置いてある仮眠室がある。他にも観用少女用の風呂やトイレ、ミルクを温める為の小さな流しとコンロもあるから、住むにはキツイが一日二日程度なら泊まり込みも可能なのだ。で、店長はその泊まり込みをしていたというわけ。

「おはようございませす、伊達君」

「おはようございませす、店長。そして千鳥ちゃん」

少し屈みながら挨拶をすると、満面の笑みを浮かべる千鳥ちゃん。この子は、観用少女にしては珍しく誰にでも笑顔を向けてくれるのだが、それは持ち主の育て方が関係しているのだろう。

千鳥ちゃんの持ち主は豊臣さんという中年の夫婦で、なんと経営しているイベント会社の社員全員で観用少女の面倒をみているそうだ。元々は夫婦だけで育てていたそうなのだが、観用少女の話をしたら見てみたい！ と請われたので連れていったら、望月

をみた蒲生たちの如く社員たちが千鳥ちゃんの虜になり、以来社員で千鳥ちゃんのミルク係のローテーションが組まれる事になったお陰で、千鳥ちゃんはこうやって人見知りしない子になったとか。

そんな千鳥ちゃんがなんで店にいるかというところ、昨日から豊臣さんの会社が社員旅行だからだ。どうも、イベント関連になると皆が観用少女を構いたがって喧嘩になるからということまで預かっている。

そう、この店は観用少女の販売の他に、預かりもやっていたりするのだ。持ち主の中には独身のサラリーマンがいたり、観用少女が非常に気難しくて他人に世話を頼めないなんて事情も結構あるので、ミルク代だけで面倒を見ている。此方としてはほぼサービスマイみたいなものだが、利用する人はそれなりにいて、預かった礼として、品物を買っていつてくれる事も多い。というか、俺の仕事の大半はこの預かった観用少女の世話だ。大して手は掛からないので楽な事は楽なのだが、たまに自分はベビーシッターになったのかと錯覚することもある。

その後、店を開けると観用少女を預けにきたお客さんや、新しく観用少女を見に来たお客さん等がやってきて、店内は少しだけ華やかな雰囲気となった。観用少女は喋らないので、何人いても騒がしくなることがないのが不思議で未だに慣れないが。

そして、観用少女は望月も含めてだが基本的には大人しいから手間はかからない筈な

のだが。

「うおつ」

何かにつけて、千鳥ちゃんがタツクルするように抱きついてきた。正面からぶつかってこられれば、まだ対応できるのだが背中を向けている状態で突撃されるとよろけてしまう。

ひよつとして嫌われてしまったのかと勘ぐってしまうが、千鳥ちゃんは変わらず笑顔のまま。嫌いな奴に笑いかけるってことはないと思うんだが……笑顔で嫌われてる可能性も微レ存？

「千鳥は、会社の男の人には体当たりして構ってもらうのが当たり前だったようで、伊達君のことが気に入らないというわけではないので心配いりませんよ」

眉間に皺でもよつていたのか、店長がそんなことを教えてくれた。よくみれば、店長もどこことなく疲れたようなオーラを全身から醸し出している。ということは。

「じゃあ、店長も昨夜はずっと千鳥ちゃんの相手を？」

「ええ。預かってから疲れて眠るまで、何度も遊べ、構えとぶつかられました。お陰で寝不足ですよ」

くあ、と小さく欠伸をする店長。正直、何時も飄々としている店長が眠たそうにしてるのを初めて見た。千鳥ちゃんの構って攻撃は相当激しかったようだ。

「ん……?」

と、しがみついてくる千鳥ちゃんから、不意に良い匂いがフワリと漂ってきた。何だこの匂い、線香……じゃないか。芳香剤とも違うし香水か? けど、観用少女に香水ってあったっけか?

「伊達君、千鳥からする匂いは『香り玉』を食べさせたからですよ」

「香り玉?」

「これですね」

そう言われながら、目の前に差し出されたのは薄い紫色をした少し大きめの飴玉っぽいもの。こんな商品もあったのか、今知ったぞ。

「これを観用少女が食べると、全身から芳しい香りがするようになります。香りは植物系や柑橘類など……様々ですね」

「へえ」

「面白いのは同じものを食べても、観用少女によって匂いが変わってくるということですよ。場合によっては、朝食食べさせた時と夜食べさせた時で、別の匂いになることもあるとか。仕組みは解りませんがね。因みに、人が食べても問題ないですよ。匂いはしませんが」

また不思議な品物だな。とはいえ、観用少女自体も謎の塊みたいなものだし、真剣に

考えると頭がパンクする。

その後も、数度のアタックを受けながらも午前中の仕事を終えて、望月へミルクを飲ませるために部屋へ戻ると。

俺の傍に寄ってきた瞬間、望月は頬を膨らませて睨むような目で見つめてきた。ど、どうした、まだ何もしてないのにそんな非難がましい目で見つめてくるなんて。

理由をたずねようとも観用少女は言葉を発しないから出来ない。喋られたとしても、こんなにむくれている様子じゃ教えてくれるかもわからんし。

面白くない、という雰囲気を全身から醸し出す望月に参って唸りながら頭をかいてみると、先ほど千鳥ちゃんからしたお香つぼい匂いが微かにした。あー、そういうことか。

「ヤキモチかあ」

よく考えなくても、持ち主が他の観用少女の匂いをプンプン纏わりつかせて帰ってきたら、機嫌も悪くなるよな。

そうになると、どう説得したらいいものか。仕事なんだから仕方ないだろは、通用しないし俺もあんまりしたくない。

「ゴメンな望月、こんな匂いさせるのは今日だけだから。何だつたら午後からは一緒にくるか？」

しゃがみこんで目線を合わせながら謝れば、まだ膨れたままだが許してはくれたよう

だ。クルリと食器棚に向かうと、自分のマグカップの用意を始める。

そして、休憩を終えて仕事に行こうとすると、タブレットを抱えたまま服の裾をギューと握り締めてついに行くという仕草を見せた。

可愛い少女のいじらしい姿……たまんねえな。

そうして、上機嫌のまま店に行き、香り玉を興味深そうに眺める望月の姿について「買うか」と口にしてしまい軽く後悔することになる。

だつてこの飴玉、十粒で四千円するんだぜ。

一粒四百円って高すぎだろ。匂いも半日も持たないし。

趣味と実益を兼ねた高い買い物をする

香り玉を買って以降、望月は自分が欲しい物はおねだりをすれば、買ってもらえるかもしれない、という事実を知った。知ってしまった。

そんなの気の持ちようでもなるだろう、と大抵の人は思うだろうが想像して欲しい。自分を慕う最上級の美少女が、何かを興味深そうに見つめた後に『これが欲しい、買って』と潤んだ瞳でこっちをジッと見つめてくるのだ。

それを見れば大抵の人は「買ってやりたい！」と激しく心を揺さぶられ、なるべく購入の方へ考えを傾けるだろうし、値段と相談して無理だった場合は「不甲斐ない持ち主で悪い」と多少は胸を痛めるだろう。

寧ろ、「ごめん」の謝罪もせずに買わないを選択できる方が人としてどうかしているんじゃないかと思うぞ、俺は。

とはいえ、望月も俺が店に出入りする客ほど金を持ってないことを理解しているのか、あの香り玉以来、物を欲しがられる事は無いのだが。うーん、助かることは助かるんだが、ほんのちよっぴり悲しくもある。我ながら面倒臭いな。

複雑な感情をもて余しながら、数日を過ごしていた時だった。

クイクイとエプロンの紐を引っ張られて振り替えると、望月がタブレットを持ち上げながら例の潤んだ瞳で見上げてきたのだ。

一瞬ええ!! と焦ったが差し出されたタブレットの画面を見て冷静さを取り戻す。これは……また耳搔きの動画か？

ということは、馬鹿みたいに高い観用少女に関する品物ではないな、ならヨシ！

何だ何だと、腰を屈めて望月が見せたがっているであろう動画を再生してみる。

何て事はない、いつも望月がよく見るタイプの耳搔きだ。変更点があるとすれば、この動画は掃除に使っているのが耳搔き棒じゃなくて、綿棒ってところか。……これの何が欲しいんだ？

疑問符を浮かべながら、黙って動画を見てみると、ある場面で画面を止め、先程と同じように見つめてくる。ん、これを買えと？

写っているのは液体の入った硝子瓶と、持っている耳搔き屋の店員だ。ちようど指が硝子瓶に印刷されている文字に被って、商品名が解らないので、一時停止を解除して動画を進めると店員の口から「みみせんけつ」という言葉が聞こえてきた。みみせんけつ、ねえ。

直ぐにノートパソコンの前に陣取って、検索をかけると、通販サイトの商品案内が一番上に出てきた。耳洗潔、なるほどこういう漢字か。

説明を読むと、ハツカと唐辛子の成分が入った液体でスツキリしながらも耳がポカポカとする仕様になっているらしい。想像がつかないな。

因みに値段は……感じかたは人それぞれでなりそうなお金だ。使い方が限定的過ぎて高いと思う人もいれば、趣味の一環と考えれば妥当な値段だと思う人もいるだろう。因みに俺は観用少女の物に比べれば全然良心的な値段じゃね？　と思つた人間だ。いや、この前の香り玉もそうだけれど、観用少女に關係する品物本気で高過ぎ、怖い。

更にそんな値段の品物を値切りもせずに、カードで購入していく客はもつと怖い。いくら、観用少女の持ち主は金持ちが多いからってウン万円、下手すりゃウン十万を顔色一つ変えないって次元が違いすぎる。望月がいなかったら関わりがなかっただろうなあ。

と、耳搔きから観用少女の品へ意識を飛ばしていたら、腕をグイグイと引かれて望月と目が合う。おう、悪い悪い、これを買って欲しいんだよな。

ノートパソコンに視線を戻して、耳洗潔の購入ボタンをポチつとす。そういえば、最近耳搔き棒ばかり使っていたから、綿棒は持つてなかつたな。一緒に買つておくか。

その後も、ついでにいくつかの商品をポチつておいた。俺の物ばかりじゃ悪いので、望月用にと最近読み始めているファンタジー小説もこつそりとポチつておく。耳洗潔

と一緒に渡したら、どんな顔してくれるやら。

数日後、頼んだ荷物が人形屋に届く。店長に頼んで俺が頼んだ荷物も此方に届くようにしてもらっていたのだ、どうせ観用少女関連の商品の荷物も、毎日のように届くし。嵩張る物でもなかったもので、望月に気付かれないようにしながら、こつそりとカバンにしまう。見つかったら、直ぐに耳掻きしたがるからな。

「伊達君、お客様が観用少女の靴を見たいと仰られているので、持ってきてくれませんか？ 出来ることなら赤系統の靴がいいそうです」

「あ、はい。解りました」

店長に声を掛けられて、俺は直ぐに靴がしまわれている場所へ向かう。こうやって作業しているうちに時間は過ぎて、あつという間に退勤時間となった。

「ほら、望月。欲しかったのが届いたぞ」

全てが終わった夜の九時過ぎ、俺は耳洗潔一式と小説を望月へと渡す。

品物を見たとき、望月のパチパチと瞬きをした後に瞳をキラキラと輝かせた。そし

て、胸元に引き寄せてぎゅっと抱き締めてからミルクを飲み干した時のように口元を微かに上げた綺麗な笑みを見せる。

こうやって見ると、改めて望月の感謝の表現は控えめだなと思う。たいていは持ち主が何かを買うと、大抵の観用少女は抱きついてきたり、少女らしくはしゃいでみたりするのだ。まあ、それに不満があるわけじゃないから、いいんだけれどさ、可愛いし。

耳掻き用品の梱包を全て開封すると、もう我慢できないといった様子で、正座をした望月がペチペチと太ももを叩いてきた。本来の予定日より早い、まあ数日なら誤差の範疇ということにしておこう。プレゼントしておいて「また今度な」は非情といえれば非情だしな。

「おし、じゃあ頼むな」

何時ものように、望月に対して垂直の位置で頭を乗せる。最初に手にしたのは、太めの綿棒擬きだ。どうやっても耳の中に入る大きさの綿棒ではない、おそらくだが患部に消毒液や薬を塗るのに使う用途の綿棒なのだろう。

もう少し手元を眺めていたかったが、ガーゼのハンカチに視界を遮られる。残念、ならば触覚と聴覚で後は楽しませてもらおう。

少しでも感覚を鋭くするために目を閉じているとカポン、という硬質な音が聞こえてきた。これは耳洗潔の蓋を開けた音か？　こういうプラスチックっぽい音、結構好きだ

な。

「…………おおー」

次にやってくるのは、耳朶の溝をなぞる綿棒の感触。綿棒が太めだから、塗れた指先で溝を拭かれているような感覚がする。綿棒は溝の中を一通り拭うと、耳の裏側まで丁寧に往復してくれた。掃除が終わってしばらくすると、耳朶全体がスウスウとポカポカが同時にきたような、なんともいえない感じになる。これがハツカと唐辛子効果か？ スウスウしてからポカポカするかと思いきや一度にやってくるとは思ってもみなかったぜ。

外側が綺麗になったので、次は内側だ。フィルムの破れるピリツという音に、どんな綿棒が使われるのか想いを馳せる。綿棒も何種類か買ってみたんだよな、望月の興味を引いたのはどれだろうか。

ペタツペタツ

どうやら取り出したのは、粘着綿棒のようだ。入口付近にペタペタと、綿棒が押し当てられては離れていく。名前の割には粘着力が弱い気もするが、実際ガムテープ並みの粘着なら叫ぶだろうから、ほんの少しくつく程度がベターな強さなんだと思う。

粘着綿棒は、入口を数回ペタペタするだけで終わった。元々二週間間隔で望月がしっかりと綺麗にしてくれるから、汚れなんて大してついていなかっただろうし、サーピス

みたいなものか？ 俺も初めての感覚を楽しめたしな。

そして遂に、メインの綿棒を使った耳掻きが始まった。耳の穴の壁に綿棒が押し当てられ、ぐるりと一周してから外に出たり、中で綿棒をくるくる回してガサゴソいう音を立ててみたりと、望月は色々試して俺を気持ちよくさせようと頑張ってくれている。

綿棒もいいなあ。耳掻きは『掻く』ってだけあってあまり強い力を加えると痛くなるが、綿棒は素材が紙で柔らかいから、多少強く押し付けても痛みはないし。折角買ったことだし、これからは耳掻きと綿棒を交互で使ってもらおうよう、望月に頼んでみるか。

最後に、耳洗潔で耳の穴の中を一通り掃除して右耳は終了だ。穴の中がスウスウすると、綺麗になった感があるな、元より綺麗なんだろうけれど。望月のお陰で。

ポンポンと頭を優しく叩かれたので、俺はゴロリと左に寝転がると、再び耳朶の掃除が始まった。この後は、極上の肩と背中の中のマッサージが待っている。今日はお返しとして、一緒に買った本を朗読するかな。

そんな事を考えていたのだが、いざやろうとしたら首をやんわりと横に振られて、櫛を渡された。

何だ、本の朗読は嫌なのか。お兄ちゃんは悲しいぞ。

高い物を買えないもの同士の集い

夕方の五時過ぎ。俺は一日の最後の仕事である観用少女のミルクを温めていた。まだ眠っている少女と預かりの少女を合わせて、今日いるのは十人。分量を計ってから、弱火で時間をかけて温める。手間隙かけてやれば、眠っている少女たちの髪や肌の艶もよくなり、引いては客にも魅力的に見えてくれるので、ミルクを温めるだけの簡単な仕事とはいえ気を抜くことはない。てか、ミルク温めるだけなんだけれど、寝てる少女たちは起きている少女たちよりも拘りが強くて少しでもぬるかたたり、熱かたたりすると突き返してくるんだよな、何でだろう。

「よしっ……こんなものか」

温度計で確認してから、マグカップに注いで少女たちに渡す。まずは注文のうるさい眠っている少女たちで、それから預かりの少女たちだ。

マグカップを渡せば笑顔は無いものの素直に飲んでくれる。やはり向けられる笑顔は、持ち主だけの特権か。

「望月はどうする、ここ皆と飲むのなら追加でミルク温めるぞ」

預かりの少女たちと一緒に遊んでいた望月に問えば、直ぐに首を振られる。今日はお

気に入りのマグカップ持ってきてなかったからな、そうなるか。

「六時になったら帰るから、それまでに準備しておいてくれよ」

こつくりと頷くと、持ってきたタブレットをとりに行く。準備と言っても持ち帰るのはタブレットただけだから、直ぐに済む。

一分もしないうちに、両腕にタブレットを抱えて望月が戻ってきた。そのまま、近くの椅子に腰掛けて脚をブラブラさせて待っていたので、俺も時間になつたら即退勤できるように飲みおえたマグカップを集めて洗っていると、音も立てずに扉が開く。店長が驚かせにきたのかとそちらを向けば、僅かな隙間から顔を覗かせてきたのは、俺と同じぐらいの若いサラリーマン。

「だ、伊達君……」

目が合うと、囁き声で名前を呼ばれた。そのままクイクイと手招きをされたので、つられるようにして俺も声を潜めて応える。

「池田さん、どうしたんですか。何かトラブルでもありましたか?」

「いや、問題が発生したわけじゃないんだが……白妙はどうしてる?」

確認すれば、観用少女の白妙ちゃんは見本として置かれている本を手にとつて読んでいた。視線は本に集中しているようで、こちらのやり取りには全く気づいていない様子。

「あそこで本見てますけど……」

「よし、俺が来たことはまだ知らないみたいだな。悪いが伊達君、こつちで少し話せないか」

「あ、はい」

返事をして音を立てずに扉を閉めれば、池田さんが長い溜め息を吐く。そして、俺と向き合うと手を合わせて頼み込んできた内容は。

「スマン、そろそろ退勤時刻なのは承知しているんだが、白妙に渡すプレゼントと一緒に見繕ってくれないか！」

池田さんは、俺がこの店でバイトをしていた時に、観用少女の持ち主になった人だ。歳は俺よりも三つ上で、ここから少し離れた会社で経理をやっているそうなの。

客と店員の関係になったのは数ヶ月前、俺がマニュアル片手に四苦八苦していた時の事。

突然、外から叫び声が聞こえてきたので、店長と一緒に店を出ると、ショーウィンドウの前でへたりこんでいる池田さんと、展示用の椅子から立ち上がったしげしげと彼を眺めている観用少女——後に池田さんが白妙と名付ける子がいた。

その後は、呆然としたままの池田さんに声をかけて、店内へと案内。その時、白妙ちゃんはずっと池田さんの顔をガン見しながらくっついて歩いていった。初対面時、俺も望月にこれに似たことをされたが、これは観用少女とかなり波長が合って懐かれた場合にやることらしい。

椅子を勧めてお茶を出し、彼の身に起きた事について説明をすると、池田さんは狼狽えた。

「そ、そんな……俺はつい先日会社に会社が倒産して無職状態なんだぞ。自分の事で手一杯なのに、こんな高額な観用少女の面倒なんて……」

当然、店長はメンテナンスの説明をする。展示用の少女が通行人を見て目を覚ますということは、珍しいものの全くないわけじゃない。俺は初めてだが、店長もこれで三度目だとか。

万が一の盗難等に備え、展示用の観用少女には保険をかけており、メンテナンス費用もそこから出るので、池田さんには一切の負担は無いことを説明すれば、向こうも漸く安堵した顔をしてメンテナンスを頼もうとしたのだが。

その時の白妙ちゃんの寂しそうな顔は、池田さんを躊躇させるのは十分なインパクトがあつたようで。

「……二ヶ月待つてくれないか？ その間に良い給料を貰える仕事を見つければ、か

つ続けられそうならこの人形を買いに来るから」

「かしこまりました、お待ちしています。お支払いの方はどうなさいますか？ ローンも組めますが」

「ローンで！」

白妙ちゃんのおねだりは、池田さんにとってプラスに働いてくれたらしく、宣言してから三週間前後で今勤めている会社から内定をもらい、今に至るといふわけだ。

「プレゼントですか？」

「ああ。なんだかんだで専用の物は、ここで白妙を買った時にサービスとしてつけて貰ったものしかないからな。迎えに来る度に、他の観用少女と見比べると申し訳なく感じていたんだ。だから、たまにはと思つて」

「お気持ち、痛いほど解ります」

池田さんの想いは、心に染みるほど深く理解できる。というか、この店に来る観用少女の持ち主で、一般人の財力しかないのは俺と池田さんだけだ。後は程度の差こそあれ、金持ちに分類されると思う。

なので、俺たちの観用少女は 他の少女に比べれば、質素な格好と言えよう。特に衣服に関しては、片落ち品を多少安くしてもらえといえ、池田さんは市販の子供服も合

わけて着まわしをしている。勿論、市販の量産品とはいってもしっかりしたブランド物だから、物凄いい見劣りするというわけでもないのだが。

「なら、どれを贈ります？ 個人的に服はお勧めしませんよ、高いのに加えて洗濯機に入られずにクリーニングに出す類が多いから、買った後も出費がかさみますし」

「だろうな、他の少女を見てつくづくそう思う。出来れば小物系で良さそうな物があると助かるんだが」

「うーん」

首を捻りながら考える。多少高くても、小物の方が持ちがいいし、手入れなんかもそれほど難しくない物が多い。どんな物を勧めようかと、この前見たカタログの内容を必死に思い返してみる。

「そういえば、伊達君もこの前望月ちゃんに贈り物をしたんだよな。参考にしたいから教えてもらえないか？」

「俺は櫛を贈りましたよ。望月が使うこともあれば、望月に頼まれて髪をすく事もありますけど……白妙ちゃんには……どうかな」

雪のような真っ白な頭髮から名前を付けられた白妙ちゃんは、肩に若干届かないくらいの長さのボブカットだ。櫛を贈り物としたら、少し物足りないかもしれない。それに櫛って「苦」と「死」を連想させるから、贈り物には云々って最近何かで聞いたんだよ

な。俺望月にプレゼントしちゃったし、望月は喜んでくれたから問題ないとおもうけど。

「他に思い付く小物というと、ミルク用のマグカップとか」

「白妙を買った時に貰ったマグカップは、まだ壊れていないんだ。本人も気に入っているから新しいのを買い与えるのもな」

「となると、アクセサリー類とかですかね。でも、観用少女のアクセサリーって、本物の宝石使ってるのが結構あるから、値段が服以上したりするんだよな」

おまけに少女に宝石なんて、どうぞ少女ごと盗んで下さいといってるようなものだ。防犯対策が整った環境でなければ、やってはいけない気がする。

「……いつその事、俺が望月にしてやったように、タブレットを買い与えるとか」

「残念ながら、白妙は望月ちゃんほどの動画勢じゃないんだ」

ならば……ぬぬぬ。

唸っていると不意に腰をつつかれたので、振り替えると望月が立っていた。そして、手には観用少女のカタログが。どうやら俺たちの話を聞いていて、気を利かせてくれたらしい。

二人してカタログを開き、片っ端からページを捲っていると、俺はある商品に目を吸い寄せられた。

それは、ぬいぐるみの形をしたリュックだ。猫や犬、ウサギや熊をモチーフにした可愛らしい物で白妙ちゃんにも良く似合うと思う。よし。

「池田さん、このリュックなんか値段的にもいいんじゃないですか？」

「リュック？　だが、白妙と出掛ける事なんてほとんどないぞ。せいぜい、この店に預けに連れ出すくらいで」

「短い時間とはいえ、毎日外に出るならリュックは使えると思いますよ。それに、お気に入りのマグカップや、読みかけの本なんか入れたりなんかすれば」

「なるほど、しっかりと活躍してくれるな。ならカタログをよく見せてくれるか？　良さそうだったらそのまま注文を頼むかもしれない」

「毎度ありがとうございます」

カタログを譲れば、真剣に検討を始める池田さん。手柄をたてた事を褒めれば、コロンビアポーズを決める望月。一体どこで覚えたんだ。いや、望月程の美少女になると何やつても様になるからいいんだだけだな。

それから十分ほどして、池田さんは白いウサギのリュックを予約すると、白妙ちゃんの手を引いて帰っていった。後日届いたそれを渡せば、早速次の日からリュックを背負って店にくる白妙ちゃん。

ぬいぐるみリュックを背負う後ろ姿があまりにも可愛らしく、望月にも欲しいかと訊

ねてみたら興味をしめしたので、黒猫のリユックを買えば背負ってくれた。

タブレットは入らないようだが、猫を背負う姿は筆舌に尽くしがたい程に可憐で、買ってよかったと自分の行動を褒め称えておく。

高い買い物をしていない日の過ごし方

休日。買い物と一週間分の作り置きを終えた俺は、キッチンで大きく伸びをした。これで、休みの間にやるべき仕事は片付いた。今回は連休なので、思う存分ダラダラ出来る。とはいえ、その前に望月の食事を用意しないと。

自分の食事の用意を終えてから、小さな鍋に観用少女専用のミルクを注いで火にかけ、温まる間ぼんやりしながら牛乳パックを眺める。

この牛乳、観用少女にとってほぼ唯一の食光源となっているからか、非常に栄養たっぷりだ。以前、好奇心から蒲生たちと一緒に飲んでみたのだが、メチャクチャ濃厚で旨かったのを覚えている。蒲生は「これを風邪気味の時なんか飲めば、直ぐに良くなるんじゃないか」とおそらく冗談半分で言っていたんだろうが、俺は風邪を治す手段としてはかなり有用なんじゃないかと思う。試す機会があるか解らんが。

つらつらと考え事をしている内に、ミルクが温まったので、マグカップへと移して望月への元へと持っていく。さて、望月は………いたいた。

「ほら、望月。食事にするぞ」

声をかければ、椅子に座ってタブレットを眺めていた望月が、此方を見る。マグカッ

プを置いてやれば、頷いてからテーブル周りを片付けてくれたので、空いたスペースに俺の食器も置き、食事をする。

手を合わせて食べはじめれば、望月もマグカップを手にして一気に飲み干した。そして、手持ちぶさたのようにマグカップを両手で弄りながら俺の様子をじっと見ている。あんまり見られると、流石に食べづらいな……。

「そうだ望月、もらった砂糖菓子も食べるか？」

ふと、思い出した事を口にすれば、頷くのが見えたので棚を開け小袋を取り出す。この中に入っているのは、様々な動物を象った砂糖菓子。その中から熊と鼠の形をしたものを取り出して、皿にのせる。

この砂糖菓子は、観用少女の為に作られた特別な物だ。立ち位置としては補助栄養剤のようなものらしい。人間でいうところの、サプリメントといったところか。

愛情はたっぷり注いでいるから、本当ならば砂糖菓子なんか頼らなくてもいいんだが、賞味期限が近いから半額にすると店長に言われたので池田さんと折半して買ってみることにしたのだ。で、食べさせた結果は『可愛い（綺麗）な少女が、可愛い形をした菓子を食べる姿は超絶可愛くて世界遺産級』ということが判明した。

SNSに上げて自慢できないのが悔しい、いや上げることがしたいはそんなに難しくはないんだが、身バレの可能性を考えるととてもじゃないが出来ない。金持ちなんかと

違って、セキユリティは普通程度だ、特定されて待ち伏せされる程度ならまだアレだ（本当は嫌だ）が、望月に何かしようとして、傷でもつけられでもしたら。それ以上に、知らない人間の暴力を受けたショックで『枯れ』でもしたら。やだやだ、考えるだけで恐ろしい。

ブルブルと首を振って嫌な考えを追い払ってから、望月へ砂糖菓子を渡す。皿を受け取ると、じつと砂糖菓子を眺めてから鼠の形をした物を両手で持ち上げて、カリカリと音を立てて齧り始める。リスやハムスターが、両手で種を掴んで食べる姿を想像してくれたら解りやすいだろう。余談だが、池田さんの白妙ちゃんはガリガリと一気に噛み砕くらしく「情緒がない」と嘆いていた。砂糖菓子のオマケで貰った香り玉もガリガリと噛み砕いたらしいので、固形物は噛み砕く癖があるのかもしれない。とはいえ、決められた物以外を食べさせれば最悪『枯れる』可能性があるので試すことなんて出来ないが。そんな事を考えながら、砂糖菓子を齧る望月を眺めていると、食べ終えたのか皿を戻してきた。受け取って洗っていると、タブレットを持ってきて真剣な表情で動画を見ていた。

……今は一体何を見てるんだろ。特に好みのジャンルもないみたいだから、オススメで出たものは片っ端から見ているようだが。訊いてみるか。

「望月、今日はどんな動画を見ているんだ？」

傍に寄ってタブレットを覗き込めば、パツと画面を隠される。な、何だひよつとして
いかがわしい物でも見ていたのか？ 確かに年齢制限的な物はかけてなかったが。

衝撃を受けていたら、椅子から降りた望月が床に転がってパシパシと床を叩く。ん、
隣に来ていつてか？

不思議に思いながらも、とりあえず誘われるままに望月の元へ行けば、さつきまで隠
していたタブレットを見せてきた。そこに映っているのは、俺と同じくらいの年齢の男
がうつ伏せになって寝転がっていて、俺の姿勢とタブレットを見比べながら、腕を掴ん
で引っ張ってくる。

ひよつとして、この俳優と同じ格好をさせるつもりか？

「あー、こうでいいのか？」

画面を見ながら似た格好をしてみると、何度も頷く望月。タブレットを操作して、少
しだけ早送りをすると、今度は若い女が寝転がっている男に寄りかかる場面が映し出さ
れ、同じようなポーズで俺に寄りかかり、再現できたことに満足げに目を閉じる。前後
のストーリーがさっぱりだが、満ち足りた表情を見る限り、お気に入りの場面を作るこ
とができてかなり嬉しいみたいだ。

数分間この姿勢を維持した後、望月がタブレットを操作して別の動画を見せてきた。
今度は女子高生が向かい合って手を繋ぎながら、額をくつつけているシーンか。

「よし、こうだな」

それからしばらく、望月がやりたいシーンの再現をして過ごした。どれも見たことのない映画（多分）だったので、どんな状況でこのシーンになったのかごさっぱりだが、男同士や女同士もあつたので、仲の良い友達同士のじゃれ合い的な場面なんだろう。どれもこれも、結構親しげにくっついてるモノばかりだったからな。

高い買い物をするお客様・その一

実は観用少女の中には、少年型の人形もある。少数なものと、服装によつては少女に見えることもままあるので表記は「観用少女」のままだが。

なんで基本少女の人形に、態々少年型を作るのかというと、観用少女を欲しがる人中に女性もいるからだ。やはり女性は、少年型がいると見たがるし、気に入つて欲しがる率も高い。尤も、本人がどれだけ気に入つても人形が目覚めなければ買い上げる事が出来ないのは変わらないが。

「あーん、今日も起きて私の事見てくれなかつたんだけれど。お迎えする名前まで決めているのに！」

「すみません。こればかりは相性もございませぬので」

「解つてるわ、また来るわよ。熱意に感動して、目を覚ます子もいるんでしょ？　ねえ、店員君」

「そうですね、一目でというお客様もいますけど、何度も通いつめて気に入られるというお客様も、それなりにいらつしやいますよ」

望月の出会いは一発だったけれどな。

俺の返答に満足したのか、また見に来るから！ と叫んでお客様は帰られた。彼女は人物を中心に撮る写真家で、依頼で何度か観用少女を撮影する機会があつて興味をもつたのだとか。そして、この店である少年型に一目惚れして今に至る、と。今日で来店回数八回目だ、そろそろ少年も目覚めるかもしれない。

「お、もうこんな時間か」

時計に視線を向ければ、そろそろミルクをやる時間になる。今日いるのは三人、望月に白妙ちゃん、そして少年型のオルトレマーレ君だ。

人数が少ないので、適温になるのも早い。それぞれが持っているお気に入りマグカップに注いで冷めないうちに運んで渡せば、オルトレマーレ君はつまらなそうな表情で、受け取る。

このオルトレマーレ君は『気難し屋』というやつになる。パツとみた感じでは、俺への態度もかなりアレに見えるだろうが、目を合わせて受け取ってくれるだけだ。以前に目も合わせてくれない、と泣きつかれたので店に持ってきたと言っていたから、その他の人間なんか、いないもの同様なだろう。

ミルクを飲み終えると、冷めた目で此方を見ながら、マグカップを突き返してきた。うーん、この態度。気難し屋の相手を何度かしてきたのもう馴れたが、知らん人は腹

立つだろうな。

三人からマグカップを回収し、洗って戻ってくれば望月と白妙ちゃんはくつつくようにして、望月が手にしているタブレットを眺めていた。週に何度も顔を合わせているからか、二人それなりに仲良くなっているようで、頭を突き合わせるようにして同じ動画を観ていることがたまにある。と、そこへオルトレマーレ君もやってきて、望月の隣に座ると一緒になって動画を見始めた。あの気難し屋の彼が珍しい……がちよつと待てよ。

(オイ、望月との距離が近すぎやしないか)

髪と髪が触れ合うような、ぐ、オルトレマーレ君の金髪が望月の頬に！ やっぱり近い、近すぎる！

解ってはいいる、解ってはいいるんだ。観用少女同士で色恋沙汰におちるなんて兆に一つもないことは。しかし、俺よりも数段顔の整った異性（最重要）が！ 望月の傍に立つのは！ 面白くない！

どうやって引き剥がそうか、なんて考えながらオルトレマーレ君の傍に寄ると、タブレットに映し出されている景色に目が吸い寄せられ、思わず足が止まる。

なんてことはない、彼の名前の由来になった群青色の海が画面いっぱい広がっている光景。綺麗だが、景色そのものとしては大して珍しくもないのだが。

（オルトレマーレ君、海が苦手なんじゃなかったか？ 今回預かったのだったって持ち主の社長さんが、仕事の関係で海外に行くから連れていけないって言われていたし）

映像なら平気なのか、だが飛行機から海見るのも駄目って言ってたし……ううむ。
悩みながら、俺はオルトレマーレ君を思い返していた。

「ねえ、ここって観用少女って人形の専門店なんですよ。この子、ボロボロなんだけれど助けてやってくれない!？」

あれは俺が、店のバイトを始めたばかりで、望月を目覚めさせる前のことだった。店長から仕事で注意すべき点を教えられ、せつせとメモをとっていた時に突然勢いよく扉が開き、眼鏡をかけた、いかにも仕事が出来そうな女性が、固く目を閉じたままの少年を抱えて入店してきたのだ。

状況が把握できずにぼかんとしている俺とは対照的に、店長の判断は素早かった。直ぐにミルクを温め直し、専用の砂糖菓子を溶かして少年の前に持っていくと、溶けた砂糖の甘い匂いにつられたかのように、彼は僅かに目蓋を持ち上げてゆつくりとマグカップに手を伸ばす。

ほんの数口だがミルクを飲み込むのを確認して、店長が安堵の表情を浮かべる。その後、電話をかけ、話がまとまるとようやくこっちへ視線を向けた。

「今、懇意にしている職人にメンテナンスの依頼をしました。一時間程で回収にきてくれるそうです。ミルクも少しとはいえ口にしてくれたので、最悪の事態にはならないかと。しかし……この少年はまだ目覚めていない状態ですよ。どうやってお客様の元へ？」

「あー、その子は戦利品というか筆取り取ったというか」

不穏な言葉を口にしながら、女性——村上さんが経緯を説明する。

少年型の観用少女を見つけたのは三日前。海運会社を経営する村上さんは、昔からの社員十数人と自前のクルーザーで会社の記念日を祝っていたらしいのだが、その際に船が一艘近づいてきて海賊紛いの略奪をやるうとしてきたそうだ。相手は銃やナイフを持って脅してきたそうなのだが、村上さんの社員もかなり腕に自信があったらしく、武器が使われる前に相手に組み付いて奪い取り、相手全員をふんづかまえたらしい。先程の観用少女は、その海賊紛いの船の中に奪ったであろう戦利品と一緒に転がされていたのを村上さんが発見し、最初は誘拐された子供の死体だと勘違いしたらしいが社員の人に「コイツ、スゲー綺麗な顔してるし服もちよつと変わってるから、最近噂の観用少女ってヤツじゃないですか？」と指摘され、よくよく見たら確かにそれっぽいので急い

で日本に戻ってきたのだとか。

「へえ、海っておつかないんですね」

「まあ、略奪行為に出くわすなんてそうそう無いから、それまで用心しなくてもいいと思うけれど」

「それにしても、よく押収されませんでしたね」

「だって通報してないもの」

「……え？」

「いや、ここだけの話なんだけれど、私たちもあんまり褒められた手段で返り討ちにしたわけじゃないから連絡できなくてさ。追っかけられても困るから、銃全部取り上げてから相手の船のエンジンぶち壊して逃げてきたの。運が良ければ湾岸警備隊に助けられてるんじゃない？」

鯨の多い海域だから、どうなってるか解らないけど。

ボソリと呟かれた物騒な言葉を聞かなかった事にして、笑みを浮かべて対応する。

過ぎたことを今更どうこう言ったところで、変えられるもんじゃないからな。大つぴらに出来ない手段とやらも、好きで選んだわけじゃないだろうし。あと純粋に怖い。世の中には知らなくていいことなんて山ほどある、これもその一つだ。

そんな感じで、素知らぬふりしてお茶を勧めたりしていると、連絡をうけた職人が観

用少女を引き取りにきてくれた。その後、作った職人も判明し店長が連絡をした所、販売する店に輸送する途中で例の海賊船に船が襲われて行方不明になっていたとのことだった。

更に販売予定の店に連絡を入れて事情を話し、代金を支払って村上さんが持つてきてくれた観用少女は、当店で飾られることになる。しつかりメンテナンスを受けた観用少女は、見違えるほど綺麗になっていた。ちょうどその日、少しばかり観用少女に興味を持ち始めた村上さんも店にきていて、自分が助け出した観用少女の変化に驚いたようである。繁々と眺めている。

「はー、見つけた時から綺麗な顔してるってのは感じていたんだけど、ちゃんとした状態だとこんなに美人さんになるのねー。これはハマるのも解るわ」

感心したように長い溜め息を吐きながら、屈み混んでじいっと顔を見つめていると。パチリと音がするかのようになり、深い青の瞳が開いて村上さんを見つめ返した。

「え?」

驚く村上さんが店長は「当たり前だと思えますよ」と平然と答える。

「この子にとつてお客様は、自分を救ってくれた凛々しい女性騎士なのですから。あ、当店はローンも承っておりますのでご安心下さい」

と、そんな事を考えていたらオルトレマーレ君が顔を上げて手をソワソワし始めた。それに気づくと直ぐに。

「オルトレマーレ♡」

勢いよく扉を開けて村上さんが入ってくる。そして、両手を広げてしゃがみこむと、オルトレマーレ君もかけよって胸に飛び込み、ぎゅうぎゅうと音がしそうなほど強く背中を腕を回す。

「ごめんねー、寂しい思いをさせて。どうしてもイタリヤに向かわなきやだったから、店長さんと伊達君にお願いしたの」

眼鏡を外して、激しく頬擦りをする村上さん。表情筋は緩みきっていて、あの仕事が出来そうな雰囲気は微塵もない。この人もすっかり観用少女の虜になってるよ、俺も人のこと言えないけど。

そして、オルトレマーレ君もまんざらではなさそうだ。表情は大して変わってないが俺には解る。何しろ耳が真っ赤になってるからな。

「でも、これで暫くは海外に出る用事は無くなつたから、当分一緒にいられるからね。……また、そんな仕事きたら我慢してもらわないとだけけど」

「ひよつとしたら、次は大丈夫かもしれないですよ」

「ええ？ どうして？」

「いや、さつき望月たちと海の動画を見てたんですよ。前、画面越しの海も駄目だった村上さん行つてたでしょ？ だから、少しは前進したみたいで」

「そうなのお？ オルトレマーレ」

村上さんの問いに、オルトレマーレ君は耳を赤くしたままコクリと頷く。その際、此方を睨んできたが。おそらくばらしやがつてという気持ちなんだろうが、君喋れないだろ。俺がいなきや多分一生伝わらないぞ。

「そっかあ、じゃあ今度遠くからでも海見てみよつか？ それで慣れたら……お店に預けなくてすむし」

もう一度、コクリと頷くオルトレマーレ君。その後、手を繋いで帰る際に村上さんは「良いこと聞けたお礼に」と上機嫌で服を数着、靴を数足お買い上げしてくれた、カード一括払いで。

「あれがスパダリ……」

どう頑張つても真似出来ないな。いや、競うつもりもないんだけれどさ。

高い買い物をするお客様・その二

とうとう俺も、お客様の接客を任せられるようになった。とはいえ、相手をするのは既に観用少女を購入されたお客様で、勧めるのは服や小物になる。店長みたいに観用少女を勧める技術はまだない。というか、流れるように商品を紹介して買わせていくあの手腕、見てるとなんか口の上の上手い詐欺師みたいに思えてくるんだよな。いや、ちゃんと割引しているから決して損はさせていないんだけど、とにかく口がすげー回るから、必須ではないものもついつい買ってしまうというか。

「どうぞ、店長には一応合格をもらってますので不味くはないと思います」
「フフ、そんなに畏まらなくて大丈夫ですよ。伊達君」

若干緊張しながら、店長相手に練習したお茶を出せば、爽やかな笑顔で受け取ってくれるのはこの店のお得意様である今井さん。イケメンがいい感じで歳をとったような渋いアラフイフだ。

しかも顔がいいだけではない、観用少女の店の常連になれるくらいだから当然金も持っている。大きな骨董店を経営しているそうで本人曰く、「人が大切に扱ってきた古いものが好きで、集めたり勉強しているうちに、それを仕事にして食べていけるように

なった」とのこと。好きなもので仕事出来るって普通できることじゃねえぞ。

くわえて、だめ押しのように持っている観用少女が望月と同じ「銘」持ちだったりする。名前は「滯標」。逸品だけあって、とにかく完璧な仕上がりで、正直に言えば望月よりも綺麗な顔をしているかもしれない。

だが、あまりに顔が整いすぎているせいも、見つめると得体のしれない焦燥感や怖気が襲ってくることもある。事実、滯標ちゃんは以前の持ち主から返品された過去をもつていた。曰く「綺麗過ぎて落ち着かない。頭がおかしくなるんじゃないかと錯覚する時がある」そうだ。

そして、返品された滯標ちゃんは長いこと店にいたらしい。いくら銘持ちでも他人のお手つきだったことと、綺麗すぎる顔に客は皆及び腰になっていたんだとか。けれど今井さんは「他の人が手放した観用少女を愛するのもまた一興」と気にせず、お買い上げしたそうだ。とりあえず、滯標ちゃんが今井さんにべったりなのと、今井さんも疎んでいる様子はなさそうなので、関係に問題はないのだろう。

「ところで伊達君、頼んでいたアクセサリーが届いたと店長さんから連絡を貰ったのだから」

「はい、サフイレットで作られた観用少女用のペンダントとブレスレットが数点見つかったので、取り寄せてみました。今、お見せしますね」

持ち込んでいたアクセサリーを小型のクッションに乗せて今井さんの元へ持つていこうとしたら。ひよこりと望月が脇から顔を出してきた。

「あ、こら望月。これは今井さんが注文したアクセサリーだから、邪魔しちや駄目だぞ」
「構いませんよ。やはり女の子だから綺麗な物には惹かれるのでしよう。好きなので見て下さい」

「ありがとうございます、良かったな望月。でも、あんまり迷惑にならないようにな」
軽く頭を撫でてやれば望月はテーブルの縁に掴まり、まるで猫のように今井さんが手にするサファイレットのペンダントを目で追う。……ひよつとして、欲しいのか？ すまん望月、俺にはそれを買うだけの財力はない。一つ云万円するし、高いつてもガラスなんだぜそれ、宝石ですらないんだ。ああ、財力が欲しいなあ。

と、そんな俗物的な事を願っている俺を余所に、今井さんは恋愛漫画でも吐かなさそうな甘い台詞を濡標ちゃんに囁きながらアクセサリーを着けてやり、濡標ちゃんは恐ろしく綺麗な、だかどこか不安をかきたてるような笑みを浮かべて、甘えていた。

アレ、これって観用少女と持ち主のやり取りだよな。まるで恋人同士のように錯覚するんですが？ 俺は一体何を見せられているんだ。そして、絵面的には凄くヤバイ筈なのに犯罪臭がしないのはなんで？

目の前の情報量を処理きしれず、ぼんやりと眺めていたところ、今井さんに声をかけ

られて我に返る。

「伊達君、良い品をありがとう。全部買わせてもらってもいいかな」

「あ、はい。ありがとうございます。それでしたら、多少お値引きしてこの価格に……」
店長に、ここまでなら値引きしてもいいと教えてもらっていた金額を提示すれば、今井さんは「助かるよ」と慣れた手付きで小切手をきる。俺の給料以上の額をポンと出せるって本当にスゲーや。

渡された小切手を奥の部屋にしまつて戻ってくれば「そういえば」と今井さんが再び話を切り出してきた。

「店長さんにも話をしておこうと思っているのだがね、私も観用少女の品を扱おうと思っているんだ」

「え、観用少女の店を始められるんですか？」

「ははは、いくら金が有ろうと眠っている観用少女にミルクを飲ますことができなければ、店なんか作れないよ。扱うつもりでいるのは、『天国の涙』さ。手に入ったら、是非とも私に譲ってもらえないか」

天国の涙、というのは観用少女が流す涙で作られる宝石のことだ。少女が目にした光景と、溢れ出る感情が混ざり合つて出来る真珠のようなもので、同じ物は一つもないと言われている。そして、その数の少なさから観用少女以上の値段で取り引きされるとの

噂だ。

理由は簡単、観用少女は泣くような状況に陥ることがまずないから。何しろ愛されるために生まれてきた存在だ、幸せであることが当たり前なので嬉し泣きすることはない。そして、悲しみや辛さで泣くのなら、その前にストレスで枯れてしまうからだ。なので、天国の涙が取れるパターンは、持ち主が不慮の事故で亡くなり、それを知った少女が深い悲しみの中で一粒の涙を流して枯れてしまうというのが多い。故に、遺族が天国の涙を形見としてしまい込む為に表に出ることは殆どないのだ。

「構いませんが、あんまり期待はしないで下さいね。天国の涙って出回る事の方が珍しいので都市伝説みたいな扱いになってますし」

「ああ、私も直ぐに手に入れられるとは思っていないから気長に待たせてもらうよ。それでは、今日はこれでお暇させてもらうとしようか」

今井さんが立ち上がったので、入り口まで見送ろうと扉に手をかけたときだった。

「す、すまない。伊達君はいるか?」

今度は池田さんが白妙ちゃんを連れてやってきた。アレ、今日は有給とって白妙ちゃんを海に連れていく予定だったんじゃない?

「どうしたんですか、池田さん。休みな筈じゃ」

「あ、ああ。出掛けるつもりだったんだが白妙の頭に、その、妙な物が生えてきて」

妙な物？ 指摘されて白妙ちゃんの頭に視線を移せば、植えたての苗のような植物がふわふわと風に揺れている。……何だ、コレ？

「これ、本物の草ですよ。頭に張り付いているし……どうなってるんだ？」

「お、俺もよく解らないんだ。朝起きたらもうこうなっていて……。だが、白妙も痛がる素振りは見せないしどうしたものかと」

「ふむ、私も初めてみたな。伊達君、店長さんは？」

「昼を買いに出ただけなんで、もう少ししたら帰ってきます」

とにかく店長待ちになった。望月も、不思議そうな顔で白妙ちゃんの謎の植物をつついているし、濡標ちゃんも首を傾げながら白妙ちゃんを眺めている。

その内に店長が、弁当を持って帰ってきた。男三人が入り口で固まっている姿に、一瞬間まるが、白妙ちゃんの姿を見たら直ぐに察してしてくれたようだ。

「池田様、それは花冠ティアラと呼ばれる植物ですよ。そのままにしておけば、観用少女の頭に、見事な赤い花が咲きます」

「そうか、ならば害はないと」

「いえ、それは寄生植物の一種ですので、観用少女を栄養に育ちます。なので、花が枯れると少女も枯れます」

「今すぐに筆を取ってください！」

大声で叫ぶ池田さん。まあ、当然の反応といえれば当然だろう。その後、花冠を引き抜く作業や、生えた場所のケアなんかで池田さんの休日旅行は消えてしまったが、何だかんだで俺たちの間にある種の友情が芽生え連絡先を交換する流れになった。そして数日後。

「オランピアの発見記念パーティー？」

「ええ、とある広告会社の息子さんが長年探していた観用少女を手に入れたので祝いたいと仰つてましてね」

再び店にやってきた今井さんから、招待状と書かれた高価そうな封筒を渡される。

「出来れば、同じように観用少女を持つている方を呼んでもらいたいと頼まれて……よかったですら二人とも参加してもらえませんか？」

高い買い物をするお客様・その三

今井さんから貰った観用少女の御披露目パーティー、少し悩んだ末に行くことにした。

不安がないわけではないのだが、池田さんも行くと言ってくれたので疎外感はかなり払拭されるだろうし、店長も「当店にお越しただく以外のお客様と触れあう機会というのは滅多にありませんから、縁を作りに行くのは悪くない話だと思いますよ。楽しんできて下さいね」と背中を押してくれたからだ。後純粹に、上流階級のパーティーがどんな感じなのか気になるのもある。

とりあえず、池田さんと相談をして当日の服装は貸衣装で何とかすることにした。今井さんは普通のスーツで問題ないと教えてくれたが、俺そもそもちゃんとしたスーツ持っていないしな。就活する前に就職先決まったし。

「俺たちの服よりも問題なのは白妙だな。ドレスなんて持っていないし、買うとしても一度しか着ないだろう服に大枚を叩くのは正直厳しい」

「あー、望月たちのドレスに関しては、店長に相談したら貸してくれると」

「本当か!？」

「ええ。眠ってる観用少女の服って、型落ち品の中でも、普段着には向かないけれど人目を引きやすい派手なのを選んで使いまわしてるんですよ。当然、何度も着てクリーニンクにも出してやるから、お客さんに売ることも出来ない。その服だったら、一晚程度なら問題ないって言っていました。汚したら買い取ってもらうって言われましたが」

「いや、その条件で構わない。店長さんに礼を言っておいてくれ。助かったと」

「それじゃ、どんな感じか見てみますか？ あんまり種類は多くないですが」

「ああ、頼む」

こんな感じで、多少バタツキながらも参加に向けての準備をして日々を過ごす。マナー的なものは今井さんに何度か連絡をして訊ねるが、立食式のパーティーだから、そこまでうるさいマナーはないと教えてもらった。とりあえず常識的な行動をしていれば、咎められることはないとのこと。何より、メインは観用少女のオランピアだから、目立つことをしなければ問題視されないと。

と、ある程度の安心材料を貰えたので俺も池田さんも以降は何時もと変わらぬ日常を送ることができた。そんなある日、ふと店長に例の観用少女について訊ねてみる。

「店長も、オランピアって観用少女の事はご存知だったんですか？」

「ええ。探していたお客様は、オランピアに随分と御執心でしてね。伊達君が来る前ですが、当店にもいらっしやって見つけたら是非に、と頼まれておりました。どうやら、他

の店が見つけたようですが」

「その、オランピアってのは銘なんですか」

「いえ、シリーズの総称のようなものですね。歌う観用少女・オランピアと言った感じの」

「歌う?」

そんな観用少女が存在するのか?

初めて聞いた単語に、店長は「伊達君には教えてなかったですね。では、簡単に観用少女の歴史について勉強しましょうか」と説明してくれた。

「SNSなどによって存在が周知されるようになったので、皆さん観用少女はここ数年で誕生したと思っっていますが、実際は八十年ほどの歴史があるのですよ」

マジかよ。

「因みに伊達君は、どれくらいの歴史があると予想してました?」

「三十から四十年くらいかなと。お客様の中に十年以上連れ添ってるって方もいたの
で」

「成る程。話を戻しますね。初期は観用少女に特性を持たせようと色々試していた時期があったんです。歌う観用少女はその時に幾つか試作され、全てにオランピアの名前がつけられていたのですよ」

「初期の初期ってことはかなり古いんですね。てか、そんなに長寿なんですか観用少女って」

「知り合いの職人によると、愛情とミルクさえしつかりと与えていけば、百年は生きていける設計にしてあるそうです」

それは、持ち主の方が先に死んじまいそうだ。

「そんな理由で作られたオランピアですが、現在の観用少女の、愛情を糧にして持ち主だけに向けられる極上の笑みには及ばなかったようで、結局数体の試作品が作られるだけで終わってしまったようですね」

「歌う観用少女も需要はありそうな気はしますけど」

「販売されていけば、欲しがる方も多かったと思いますよ。ただ、どうも調整が安定しなかったようです。観用少女は人形ですが、同時に生きています。好きなように鳴らせるオルゴールのようには出来なかったのでしょうか」

うーむ、と顔をしかめたくなる理由だが解らないでもない。歌う事をウリにしているのなら、やはり自分が聞きたいタイミングで歌って欲しい気持ちはある。決して安い買い物ではないわけだし。

「まあ、あまり深く考えなくてもよいと思いますよ。試作品とはいえ、壊される事なく残されていた観用少女です。ある程度、持ち主の要求に応えられるのでしょ」

「そうします」

「あ、そうだ。パーティーの日の為に当店の名刺を作ったんですよ。もし、望月を通して観用少女に興味を持つ方がいらつしやいましたら渡してもらえますかね」

「アツハイ」

接客中のような満面の笑みを浮かべながら、結構な量の名刺を渡されたので機械的に受けとる。この量、いつの間に。やはり店長となると、ここまで商魂逞しくなければやっていけないものなのかもな。

そうしてパーティー当日。俺は仕事をしながら、池田さんは半休をとってそれぞれの観用少女の身支度を手伝っていた。

「何から何まですまないな、伊達君。まさか服はおろかアクセサリーや靴まで無償で貸してもらえるなんて」

「そんなに気にしなくても大丈夫ですよ。店長も、あまり観用少女に興味を持っていない人に、アピールできる絶好の機会」と言ってたんで。望月と白妙ちゃんは丁度いい宣伝みたいなものですよ」

「だとしても、借りれば相当の値段になるだろうに。そうだ、役に立つか解らんが、この

店の為に来ることがあれば言ってくれ。手伝うよ」

「それなら店長から観用少女に興味を持った方がいたら渡してくれと名刺預かって。一緒に配ってもらえますか？」

「ああ、喜んでやらせてもらおうよ」

貰った名刺を三分の一度度出せば、嫌な顔せずを受け取ってくれる。俺よりも社会人生活が長い池田さんも配ってくれるなら、多少は捌ける筈。

時計を確認すれば、そろそろ出るのに良さそうな時間なので店長に声をかけて池田さんと会場へ向かう。観用少女を連れてくるからか途中、かなりの視線を向けられたが、二人揃って高いスーツ（借り物だが）で身をかためているからか、不審がられるというよりは好奇の感情がほとんどだった。やっぱ外見て大切なんだな。指定された場所に着くと、望月や白妙ちゃん以上に着飾って美しくなった滯標ちゃんと今井さんが待っていた、大型タクシーを呼んでいてくれたらしい。十分以上車に揺られてたどり着いた先は、県内でも名の知れたホテル。俺と池田さんは、つきり大宴会場を借りきっているのだと思っていたのだが。

「いや、観用少女の持ち主は金持ってる人が大半なのは解ってたけど……規模がスゲー」
「金は有るところにはあるんだな」

まさかのホテル丸々借りきっていると想像もしていなかった。ホテルを貸し切り

できる金額なんて知らないが、ひよつとすると観用少女買うよりも高くつくんじゃないのか？

ロビーに入ると、既に何人もの客が寛いでいたり、カウンターでチェクインしていた。遠方からきている客もそこそこいるんだろうか。

物珍しげに見ている内に人が増えたので、人々の後ろについて大宴会に向かう。その後、パーティーが始まるが、正直恥をかかないように行動することと、店長から貰った名刺を池田さんと捌くことに必死で覚えていない。配り終えて一息ついていると、子供らしい可憐な、けれど美しい歌声が響いてきた。振り向けば、作られた特設ステージの上で長い髪の愛らしい少女がいて、満面の笑みを浮かべて歌っていた。言われなくてもあれが例のオランピアなんだろう。八十年も前の観用少女だから、もうちよい古臭いタイプなんだろうと決めつけていたが……普通に店にあつてもおかしくない見た目だな。悔っていたぜ。

歌い終わると、一齐に拍手が起き客がオランピアと持ち主であろう男性の元へ集まっ
ていき、歌声を誉めちぎっている。純粋に讚えているのもあるんだろうが、おべっかや
胡麻すりもかなりあるんだろうな。

人が一気になくなったので、これから何をしようか考える。名刺はもう無いし、
食べるといっても酒がメインだから、望月連れて酔っ払うのもアレだし。

(そういえば、このホテルって展望室があることで有名なんだよな)

「望月、このビルの最上階は展望室になってるんだ、今日は天気もいいから夜景もよく見えるだろうし、行ってみないか？」

手を差し出しながら誘ってみれば、望月が俺の手と自分の手を交互に見返し、指を絡めるようにして握り返してきた。俗に言う『恋人繋ぎ』という握り方で。

(あー……)

一瞬、どうしようかと悩む。やんわりと離してシエイクハンド繋ぎに直そうかとも思ったが。チラッと望月を見れば、僅かにだが緊張しているような表情をしてる。やはり、離される心配をしているのか。

(……いいか)

どうせ人はオランピアたちに夢中で、気付きもしないだろう。別に悪いことをしているわけでもないし、名刺が予定よりも早く捌けたのも望月がやってきた人に愛想笑いを浮かべて興味を引いてくれたのもある。これくらいは、可愛い我が儘の一つだ。

「よし、じゃあ行こうか」

笑顔でそのまま歩き出せば、望月は顔を俯かせたまま、ぎゅうぎゅうと強く握りしめてきた。

オランピア効果のお陰か、展望室には誰もおらず貸し切り状態だった。広がる夜景を目にした途端、目を輝かせ手を握りしめたまま走り出す望月。確かに綺麗な眺めだが、それほど珍しいものでもない。喜んでいる望月の姿に、楽しんでもらえて良かったという気持ちと、この程度しか出来なくて申し訳ないという気持ちが胸にせりあがってくる。

「なあ、望月」

膝をついて話しかければ、首をかしげながら顔を向けてきた。

「俺はさ、多分望月……いや、観用少女の持ち主には相応しくないのかもしれない。村上さんみたいに好きなどころに連れていける乗り物は持ってないし、今井さんのように望月の魅力を引き立てる服やアクセサリーなんかも気軽に買ってやれない。オランピアの持ち主みたいに、望月の為にビルを貸し切るなんてのはもっての他だ」

「けれどさ、望月は俺を選んでくれたから、少しでも俺と一緒に入れて良かったと思えるように努力する。だから望月もずっと俺の傍にいてくれ。頼む、な？」

まるで告白のようだと思いながらも、感じてる素直な気持ちを言葉を口にすれば。

望月の顔は。今日いや、今までみた中でも極上の笑みだった。

まさかの高額キャッシュバック

それが起きたのは、様々な偶然が重なったからだ。

例えば、大学の同期との飲み会があつて隣にいた奴が咳き込んでいたとか、久しぶりの飲み会で、ついつい調子にのつて自分でも自覚があるくらい飲み過ぎたとか。

加えて、酒臭い息で望月の元に帰りたくない公園のベンチで休憩していたらうつかり寝てしまい、オマケに気がついたら小雨が降っていて濡れていた。その時点で、少し喉に違和感があったのだが、どうせ明日は休みだし寝て起きたら治るだろうと薬も飲まずにそのまま寝てしまった結果。

「ゲホツゲホツ……三十九度超え……マジかよ」

(多分) インフルエンザでは無いものの、高熱で動けなくなっていた。

「も、望月……」

ぼんやりと霞む視界の中で、不安そうな表情でこちらを窺う望月の顔が見える。ああ、そういうえばミルクまだやってなかったな。せめてミルクだけは用意しないと。

節々の痛みを無理やり押しやって立ち上がろうとしたものの、情けない声をあげて布団の上ですつ転んだ。

「や、やべえ……」

熱で目の前が朦朧とする。頭の中がふわふわして、意識がはつきりしない。正直、望月のミルクの事がなければ寝ているのか起きているのかも曖昧なくらいだ。これは不味い。悪いがミルクどころじゃない、命の危機をヒシヒシと感じる。

「悪い……そのボディバックの中に財布があるからとって来てくれ。後、テーブルに置いてあるスマホも」

直ぐに頼んだ物が手渡されたので、財布の中から名刺を取り出す。これは以前、村上さんから貰ったハウスキーパーの事業所の名刺だ。彼女の言葉を思い出す。

「私がよく頼んでる業者のヤツよ。オルトレマーレとは無理だったけれど、観用少女の世話を経験したことのあるスタッフもいるから、どうしても望月ちゃんに手が回せないって時は使ってみるといいんじゃない？」

「あー、もしもし。観用少女の世話を一日お願いしたいんですが。はい、はい、住所は……」

気力を振り絞って電話越しに用件を伝えれば、三十分程で来てくれるとのこと。望月に入口のロックを外してもらってから、念のために管理人さんに来客の連絡を入れ

ば、問題はないはずだ。

起きているのがしんどくて、直ぐに瞳を閉じれば安心感もあるのだろう、意識が曖昧になっていく。そして約束の三十分が経ったのか人の気配を感じたので、顔を上げると。

「初めまして、お電話いただきありがとうございます。本日お世話になる——あら、ひよつとしなくても、伊達君？」

「え、その声……喜多さんですか？」

「すいません、望月の世話を頼んだのに、俺の面倒までみてもらって」

「別に構わないわよ。逆に、重病人を見て見ぬふりして観用少女の世話だけしてる方が、申し訳なくなるし。上乘せになる料金も、伊達君との仲だし今回は秘密にしておいてあげる」

額に貼り付けられた冷えピタが心地よい。目を閉じたまままで悪いなと思いつつも、意識を保つためにも会話を続ける。

喜多さんは、大学の同じサークルに属していて、三つ学年が上の人だった。なので、接する期間はそれほど長くはなかったものの、思い出は色々である。

理由は単純、この喜多さんとはかく世話焼きで、かつ甘やかし上手だったのだ。どれぐらい甘やかすのが上手いかというと、サークル内での喜多さんのあだ名が「母さん」だったことから察してもらえらるだろう。

サークル内にいた時も、喜多さんは細々と何かをしていて、手を動かす事を止めることがなかった。部屋には何時も喜多さんが作ったお菓子が置かれていて、喜多さんの隣には悩み相談にのつてもらおうとしたり、甘やかされたい男女が常に貼りついていた。あー、そういうえば俺が耳搔きに嵌まったのも、手持ち無沙汰だった喜多さんに「耳搔きするの好きなの。やるから膝に頭のせて」って誘われてやつてもらったからだだったんだよな、懐かしい。

「伊達君」

「っはい、喜多さん」

思いつきに浸っていたら、名前を呼ばれて我に返る。

「さつき教えてもらった掛かり付けのお医者さんに電話して、午後から診察の予約とれたから、タクシーも頼んでいいかしら？」

「お願いします」

「後、市販の薬があったから飲めるようなら何か食べられるものつくるけれど、いけそう？」

「重くないものなら」

「それなら……ねえ、観用少女ちゃんの名前って何て言うの?」

「望月ですけれど……」

「ありがとう。あのね望月ちゃん、貴女のミルクを少し伊達君に使いたんだけど……いいかしら?」

会話の様子は窺えないが「ありがとう、いい子ね」というやりとりを聞く限り、頷いてくれたんだろ。流石俺の望月、気配りも出来て最高だな。

少しして「どうぞ」と出されたのはパン粥だった。濃厚で旨い、しつかし前に冗談で言ったことを実践することになるとはな。今度蒲生に教えてやろう。

「はい、それじゃあ薬と水はここに置いておくから、食べ終わったら飲んでね。望月ちゃんの話はしつかり見ておくから、伊達君は少しでも早く風邪を治すこと。いい?」

小声ながらも返事をすれば「いい子ねー、素直な子大好き」と頭を撫でられる。子供扱いしないで下さいよ、と言いたいところだが、病気の身には、この優しさと甘やかしに安心する。

食べ終わった食器を片付けてくれる喜多さんの背中を見送ってから、俺は睡魔に任せるままに目を閉じた。

「伊達君、後二十分くらいでタクシーが来るからそろそろ起きて着替えた方がいいわよ」
ゆさゆさと揺すられて、目を覚ます。多少は薬が効いているのか、熱っぽい感覚はかわらなものの、視界はだいぶクリアだ。

起き上がろうとするものの、やけに重い。何だ？ と視線を下げれば布団に覆い被さるようにしがみついている望月がいた。

「望月ちゃんね、ミルクを飲んだ後はずうっと心配して、寝てる伊達君の傍から離れようとしなかったのよ。健気ねー」

そうだったのか、悪いことしたなと、俯せのまま身動きしない望月を撫でようと手を伸ばしかけた瞬間、とんでもない事を喜多さんが言いはなつ。

「それにしても、観用少女って涙を流すと石になるのね、ビックリしちやった」

「え……泣い、た？」

「ええ、ほらみて。真珠のようにキラキラして宝石みたい」

綺麗よねーなんて笑みを漏らしながら、喜多さんが掌に『天国の涙』を転がしてくれ
た。それも七粒もだと!?

「も、望月……」

恐る恐る、望月に触れる。……髪の毛の艶よし、肌も荒れた様子はない。体温もあるし呼

吸もしっかりしている。

(よ、よかった……)

顔を上げて具合を確認しても、異常がありそうな様子はない。動かないのも泣きつかれて寝ているだけで、メンテナン스가必要な状態ではなさそう。本当によかった。この前、望月にあんな告白まがいなこと言っただけで、枯らしたりなんてしたら、一生後悔して生きていくしかない。

「凄く懐かれてるのね、でも女の子泣かしちゃ駄目よ」

「もう二度としません。……あ、喜多さん。これ一粒どうぞ」

「あら、いいの？　ありがとう」

「『天国の涙』って言うんですよそれ。もし要らなくなったら『紹鷗』という骨董店に持って行って下さい。そこの今井さんという方が欲しがってるんで」

「へー」

しばらくしてから「ちよつと伊達君、あの値段なに!？」と驚いた喜多さんから電話を貰うことになるのだが……それは数年後の話だ。

だてくんがかぜをひいた。

ねつでくるしそうにしていたのに、わたしはなにもしてあげられなくて。

やってきたおとなのおんなのひとが、だてくんをかんびようしてあげていた。

だてくんをたすけられないのが、かなしくて、つらくて。

きがついたらないでいた。なみだはとまらなくて、だんだんむねがくるしくなる。

このままこわれちゃうのかとこわくなっていたら、おんなのひとが「だいじょうぶ
かせだから、おいしやさんにいけばすぐによくなるわ」おしえてくれてなみだはとま
った。

おんなのひとのいうとおり、ふつかでだてくんはげんきになってあんしんする。

よかった、うれしい。けれど。

おとなだつたら、わたしひとりでだてくんをたすけられたのかな。

おとなだつたら、あのおんなのひとみたいに、だてくんにやさしくしてあげられるの
かな。

おとなだつたら——。

高い買い物への支払いを終える

あの後、掛かり付けクリニックでの点滴と望月のミルクの栄養が功を奏したのか、次の日には体温はほぼ微熱程度に収まった。とはいえ、微熱でも熱があるのは変わらないし、無理をしてぶり返すのも迷惑になるだろうから、もう一日休んで様子を見させてもらったが。店長も「有給ありますし、無理しないで下さいね」と言ってくれたし。

仕事復帰して直ぐに、今井さんが店にやってきたので、俺は早速『天国の涙』の買取りを頼む。観用少女本体よりも高いなんて噂がある代物だが、流石に望月の値段には及ばなかった。それでも一粒で、普通自動車の値段がしたんだけれどな。

「いやはや、まさか『天国の涙』をこんなに入手できるとは。しかし伊達君、これだけ泣いて望月ちゃんは平気なんですか？」

「その時に頼んでいた喜多さ……ハウスキーパーの人が泣いてた望月を宥めてくれたそうでなんとか」

「ほう……それにしてもいい色ですね。深い群青色に、シラー効果も入っている。サファイアやブラックオパールに劣らぬ美しさだ」

「そ、そうですか（俺が着てたパジャマと同じ色なんだよなあ）」

見せた五粒の天国の涙を、今井さんは躊躇すること無く全て買い上げてくれた。なかなか見ることのない金額に生唾を飲み込みながら、渡された小切手を隣でやり取りを眺めていた店長に横流しする。

「おや、いいのですか。多少は手元に残しておきたいのでは？」

「いや、これ全額でほぼ望月のローン完済になるじゃないですか。やっぱり借金は早く返したいというか」

というか、慣れない人間が大金持つと後が怖そうなんだよな。だったら、さっさとローンを終わりにして身軽になりたい。

しっかし、半額近く割引してもらった上に普通自動車五台分の金を払っても、僅かにローンが残る望月の値段がとんでもなさ過ぎる。よほどの成功者でもなけりや、ポンと出せんぞ。店長はこの場所に、そんな金持ちがいると思っていたんだろうか、今更ながら疑問が沸く。

「ところで、肝心の望月ちゃんの姿が見られませんね。今日はきていないので？」

「はい。なんか気になる映画でもあるのか、タブレット離さなくて」

そんな会話をしたのが二週間前のこと。望月の引きこもりは未だ継続中だ。

「望月、今日はどう……またここにいるのか」

最後まで口にする前に、望月がプルプルと首を振る。無理かなとは思っていたが、やっぱりか。

「白妙ちゃん、会いたいみたいだぞ」

別段淋しがる素振りは見せないものの、最近の白妙ちゃんは店に来ると、辺りをキョロキョロと見回すようになった。日によっては店の中をウロウロして、誰かを探しているような素振りを見せる。その事を教えてやれば、望月は僅かに表情を曇らせるものの、もう一度首を振って行かないことを示した。

別に喧嘩しているわけじゃないんだよな、というか観用少女同士で喧嘩するのか？

「そっか。じゃあ昼に戻ってくるから、待っていてくれよう。」

軽く撫でれば、コクリと上下する頭。……最近、なんか頭撫でると違和感を覚えるんだよな。ただ、その理由がよく分からないんだが。

鍵をかけて部屋を出て、歩いている最中だった。

「あ、スマホ忘れたな」

店の鍵を探していたら、バッグの中にスマホが無いことに気づく。どうするかな、仕事には使うこともないし、昼になれば部屋に戻るからその時に持っていけば問題はないんだが……。

「時間もあることだし……取りに行くか」

何となく気分分で、帰ることにした。今日は早めに家を出られたから、行つて戻つても問題は無い。扉を開けて玄関に置いたままのスマホを手にして、バッグに突っ込む。その時ふと悪戯心が沸く、このまま部屋に入つて、望月を驚かせてやろうと。

音を立てずに靴を脱ぎ、リビングへと向かう。さて、望月は何をしていることやら。ガチャリと小さな音を立てながらドアノブを回すと、冷蔵庫の近くで後ろ姿を発見する。よし、気づいてないな。

「おい、ははビックリしたか」

声をかければ、大きく肩を震わせて焦った表情の望月が振り返る、なぜかティースプーンを咥えて。

「……ん？」

なんでそんなの咥えてるんだと視線を下げれば、望月の右手には金属のフタ、そして左手にはジャムの瓶が握りしめられていた。

「『育つて』きていますね」

「左様デゴザイマスカ……」

予想通りの言葉に、唸りながら返事をする

望月は、居心地悪そうに俯く。

衝撃の光景を見た瞬間の後は、正直よく覚えておらず、気がついたら望月を俵抱きにして店の前に立っていた。そして、店長にテンパリながら事情を説明して今に至る。

「はあ〜」

口から漏れ出すのは溜め息ばかり。何で今まで気がつかなかったのか、それしか出てこない。最近ゆったりした服しか着なかつたのを、好みが変わつたのか程度にしか考えてなかつたが、伸びはじめた身長を隠す為だつたんだらう。頭を撫でた時の違和感も、大きくなつていたからだらうし、最近ジャムの減りが早いような気がしていたのも解つていた。

思い返せば「そういえば……」と出てくる事なんざいくくらでも出てくるのに、今の今まで気づかないなんて、持ち主としても店員としてもどうなんだ、はあ。

「仕方がないと思いますよ、少女が自分からミルク以外の物を口にするなど私も初めて耳にしましたし」

落ち込んだ俺の姿を見かねてか、店長が慰めの言葉をかけてくれるが、じゃあ仕方ないですよー、気分は切り替えられない。

「ところで、メンテナンスの方は……」

「可能ですよ、今回は持ち主の責任ではないから料金も発生しません」

それを聞いて少し安心する。以前見せられた自己責任のメンテナンス費用も、笑えない金額だったからな。下手すると新たなローンを組むはめになる。

「ですが……」

「ここで、店長が僅かに言い淀む。珍しいな、結構はつきり意見をいう人が、言葉につまるなんて。渋い顔をしたまま「こちらへ」と商談室へと呼ばれたのでついていく。

「何か問題が？」

「今回の『育ち』は、望月が自らの意思で行ったのですよね。その場合、身体のメンテナンスだけでは同じことを繰り返す可能性がございます」

「……あー」

「メンテナンスと言えど、短期間で繰り返せば少なからず負担になります。加えて、異物を口にする機会が増えれば『枯れる』危険も考慮しなければいけません。なので、記憶の方のメンテナンスも行うことがお勧めされますが……」

メンテナンスには主に二種類ある。身体面と記憶に関する物だ。

記憶のメンテナンスは、望まぬ目覚め時にやったりするのだが、簡単に言えばパソコンなんかの記憶の初期化みたいなやつになる。

仕草やミルクを飲んだ後の表情は変わらないので、記憶を弄ったところで望月そのも

のの人格が失われるわけではないが、今まで過ごした記憶が望月から消えるのは……。

「正直、私としても伊達君にどうアドバイスしたらいいか迷っています」

「……あの、店長から見て望月が成長するのは、上手く行くと思いますか？」

「そうですね……。おそらく成功するでしょう。人が加減しながら食事を与えているわけではなく、本人が様子を見ながら行っていますからね。どこまでが大丈夫で、どこまでが危険かはよく理解しているでしょう。……成長後の姿の保証は致しかねますが」

なるほど、それが解れば腹は決まった。

「でしたら、店長。俺——」

どうしたいかを伝えれば、店長も微笑みながら肯定してくれる。

「そうですね、私も伊達君と望月の今の関係ならそれが一番良い選択だと思いますよ。

ああ、その事で何かが入り用でしたら、特別価格でお譲りしますので」

「アツハイ」

やはり店長は店長だ。

仕事を終え、望月の手を引いてマンションへと戻る。あれからずっと顔を下げっぱなしだったが、ミルクを出せば少しだけ顔を上げ、マグカップを手にとっていつものよう

に一気に飲み干す。それを見届けてから、休憩中に抜け出して買ったプレーンヨーグルトの封を開け、例の砂糖菓子を砕いて混ぜる。

「ほら」

差し出せば、妙な顔つきで見つめてくる望月。何でこんなものを出してくるのか解らないといった様子だ。

「何時もミルクを飲んでるから、乳製品の方が反応が少ないんじゃないかって店長が言ってたんだよ。とはいえ、あくまでも想像でしかないらしいけど」

まだよく解ってないようだ、手を付ける素振りはない。

「……メンテナンスはしない。なんのつもりで大人になろうと思ったのかは知らないけれど、俺は望月が決めた事を尊重する」

「てかき、店長に言われたんだ。成長を止めさせるには記憶をリセットしないと駄目だって。それ聞いて……嫌だと感じた。この前、展望室で望月に言った言葉も、それを聞いて喜んでくれたのも無かったことになるのがっておおう」

言い終える前に、望月が腕に顔を押し付けてくると、グリグリと擦り付けるように頭を動かしてきた。はは、なんか猫みたいだな。

「ああ、そうだ。店長からは、このままいけば上手く育つだろうって言ってもらえたから大丈夫だと思うけど、帰ってきたらぶつ倒れてたなんてのは嫌だから、食べるのは俺の

前でやってくれよ。約束だ」

グリグリと、返事をするかのように頭を擦り続ける。不安が全くないわけじゃないんだが、望月は望月だ、そう思えばどんな姿も受け入れられるだろう。

俺が許可をしてから、望月はミルクを飲み終わるとプレーンのヨーグルトを引つ張り出して食べるようになった。食べる機会が増えた事と、育つと食べられる量も増えるのか、目に見えて背丈が伸びている。今までは、高身長のお嬢さん少女の服でなんとかなっていたが、そろそろ大人用の服を用意した方がいいかもしれないと、ネットで望月が好みそうな服を色々サイズを変えて数着注文して用意して数日。

「伊達君」

朝、知らない声が俺を起こした。

「伊達君、起きて」

布団越しから身体を揺すられる。声に覚えは無いが、この起こし方、急いで布団をはね上げれば、毛先が藍色の不思議なグラデーションをした黒髪と、キラキラと輝く金の瞳を持つ高校生くらいの美少女が俺を見下ろしていた。

「お早う、伊達君」

「望月……でいいんだよな」

「うん」

念のために訊ねれば、微笑みながら頷く美少女。口角を僅かに上げるこの笑い方、望月と同じだ、いやまあ身体的特徴は一緒だったから、そうだろうとは思ってたけどさ。

「なんか……一気に成長したな」

「起きたらこうなってたの」

とりあえず、サイズが合致した服があったらしく、着てくれているのはありがたい。これ、もしちようどいい服がなくて俺の服を適当に羽織っていたりなんかしたら間違いない奇声を上げていた。望月の前ではなんと「頼りになるお兄ちゃん」でいたいしな。

「んー、色々と訊きたい事とかもあるんだが……何だつて大人になりたがつたんだ？」

大人になったからか、少女から変質したせいかは解らないが、普通に意志疎通が起きるようになったので、一番気になつていた事を聞いてみる。すると、返ってきた言葉は。「風邪引いた時にね、決めたの。伊達君が私に優しくしてくれたいに、私も伊達君に優しくしたい。困った事があつたら助けてあげたいつて」

「だって、私の伊達君だもの」

つまり……アレか？ 俺は「歳の離れた可愛い妹」的な目で見ていたが、向こうは「身

内以上の感情」を俺に持っていたということか？

「……何時から『私の伊達君』って思ってくれてたんだ？」

「起きた時からだよ」

あ、これはもう俺が絶対に責任とって幸せにしないとイケないやつだ。

俺は直ぐ様スマホを手に取り、此方に顔を向ける望月を撮る。

「どうしたの？」

「とりあえず蒲生たちに自慢する」

とびきり可愛い顔が撮れたので、アイツらのグループLINEに載せる。後は店長にも見せつけて、池田さんたちにも教えて……忙しいな。

「よし、着替えて店長の所に行こう」

「今日、お休みの日じゃなかったっけ？」

「俺の為に大人になった望月を見せに行つて何が悪い。後は……買い物かな、何か入り用とか欲しいものがあるか？」

「うーん……服は大丈夫そうだし、今すぐこれが欲しいってのはないかな。それより私、伊達君と出掛けたい」

「いいけど、休み今日だから遠くは無理だぞ。何処行きたいんだ？」

悪戯っぽく笑つて望月が答える。

「海。白妙ちゃんみたいに、手を繋いで！」

再び高い買い物をするはめになった

眠っている少女と、預かりの少女たちの分のミルクを温めていたら、小さな音を立てて扉が開く。振り替えれば、望月が顔だけだして此方の様子を伺っていた。

「伊達君、眠っている子たちの着替えの手伝いは終わったけれど、何かすることある？」
「なら、マグカップを人数分用意してもらえるか？ そろそろいい温度になりそうなんだ」

「うん」
返事と共に部屋に入ってくると、戸棚からマグカップを取り出して机の上に置いてくれる。

今日の預かりは白妙ちゃんとオルトレマーレ君に今井さんの買い物についてきた滯標ちゃんだ。オルトレマーレ君は海を克服し、一緒に海外に出掛けられるようにはなつたが、船はまだ駄目らしい。まあ、一度枯れかけているからな、そんなに簡単に全部平気とはならんだろう。

温かいミルクを注げば、トレーも用意してしてくれた望月が、白妙ちゃんたちの分を載せて持っていつてくれたので、俺は眠っている少女たちを担当する。チラリと横目で

窺えば、白妙ちゃんたちは素直に受け取っていた。ちゃんと、目の前にいるのが望月だと解っているらしい。ただ、何で大人になっているかまでは理解していないそうだ。望月も「私たちは普通、大きくならないから」と言っていたから、観用少女の中の常識には当てはまらないのだろう。

マグカップを回収して洗っていると、望月も戻ってきたので声をかける。

「どうする、ここで飲むか？」

「時間あるし、そうするね」

「解った、終わったら用意するからちよつと待っていてくれ」

「それなら、後は私がやっておくよ」

「そうか。じゃあ頼むな」

場所を変わって俺はもう一度ミルクを温めると、タブレットで見ていた映画で流れた歌を楽しそうに歌っていた。何か、育ってからまた新たな一面が見えてきたな。

「お待たせ」

「ありがとう」

大きめのマグカップに、なみなみとミルクを注いで渡してやれば、一気に飲み干して、ひかえめな微笑を浮かべる。この一連の動作は、少女時代から変わっていない。

成長した望月だが、大人になったからといって『人間』になったわけではなく、観用

少女は観用少女のままだ。なので食事の主役は変わらずミルク、人の食事も出来ない事もないが、あまり食べすぎると気分が悪くなるらしい。

望月が育つて海に出かけた日、店長に自慢もとい報告に行ったら、店長も馴染みの職人さんに訊いてみてくれたようで、次の日に仕事に行ったら色々と教えてくれた。

ざっくり言えば、望月の状態は『変質した観用少女』だそうだ。食事は観用少女のままだが、大人になった分少女よりも丈夫になったので、多少なら人の物を食べても平気になったし、服なんかもそんなに高い物じゃなくてもよくなったそうだ。とはいえ、こんなに綺麗な顔した望月に特売のダサTを着せる気はさらさらないが。

「今日はこれでお仕事終わり？」

「ああ。けど、池田さんが白妙ちゃんのお服買いに行きたいから、望月と一緒にきてくれないかって頼まれてる。いいよな？」

「ミルクは飲んだから私はいいよ」

「ついでだし、衣類で欲しい物あるか？」

「それなら……帽子が欲しいなあ。今外でる時に被ってるの、海に行く時に買ってもらったのだし」

「言われてみればそうだな、解った」

連れて歩いて、観用少女時代のような好奇や不躰な視線は向けられなくなったもの

の、美少女っぷりは変わらない（ある意味増したかもしれない）ので、人目を引くのは変わっていない。綺麗すぎて躊躇するのか、声をかけられることはないが、向けられる強い視線は正直面白くないので、海に行く途中にストローハットを買って被せたのだ。ジロジロ見られるのは、望月もいい気分がしなかったようで、以来出かける時は深目に帽子を被っている。

そこまでやれば、態々顔を覗き込もうとするような奴はいないし、この店も気軽に入れるような金額の店じゃないので「美人の名物店員」を見にやってくるようなのもいない。平和なもんだ。

そういえば、海に行った日に今の望月の写真を蒲生たちに送ったら、全員判を押したみたい。「一生推せる」と返してきたんだよな。どうやらミルクに関しては、アイツらに任せておけば困ることはないようだ。

「今日もいい買い物できましたよ。ありがとうございます、店長さん」
「こちらこそ、いつも鼻肩にしていただけ感謝しております、今井様」

商談室の扉が開き、店長たちが戻ってくる、ぬいぐるみを抱えてぼんやりしていた溻標ちゃんが、微笑みながら今井さんの元へと歩いていく。今井さんもそれに気がつく、しゃがみこんで来店した時には持っていなかった小袋を渡してあげている。またお高い物を買われたんだなあ、とやりとりを眺めていれば、今度は二人してこっちにやつ

てきた。

「やあ、望月ちゃん久しぶり。話には聞いていたけれど、本当に綺麗になったね」

「今井さん、ありがとう」

「ああ、そうだ伊達君。買い取らせてもらった『天国の涙』なんだけれど、早速三つも売れてね。顔見知りの宝石商なんだけれど、買い取った額の三倍程度の金額を提示してみたら即決してもらえたんだ。いい取引だったよ、望月ちゃんはもう泣かないと思うけれど、また『天国の涙』が手に入ったら声をかけてもらえると嬉しいよ」

「へえ……三倍……へえ……」

『天国の涙』が、観用少女本体よりも高額になる理由が、少し解った気がする。貴重、というだけじゃないんだな、きっと。

いいなとは思うものの、だったら俺が買取金額の三倍で捌けるかと言えば答えはノーなので、深く追及するのは止めておく。特別な事をせずに大金が手に入ったという事実だけを喜んでおけばいいんだ、それ以上求めてはいけない。

「それにしても、二人とも以前以上に仲睦まじい。式をする時は濔標共々、必ず呼んで下さいね」

「いやあ……出来ればいいんですけど……ね」

苦笑いしながら今井さんの言葉を受け止める。俺と対等になりたいという思いだけ

で、枯れる危険を冒してまで成長してくれた望月の為、何よりも責任とりたい自分自身の為に、籍をいれたいんだが、さっきも言った通り望月は観用少女だから、身分証明できるようなものがないのだ。

蒲生たちからは「指輪を交換して、ちよつと高めのレストランなんかで、二次会擬きのパーティーで充分じゃないか？俺たちも参加して祝福するぞ」と言われているんだが。

なんというか……人じゃないからこそ、公共からの証拠というか証が欲しいというか。無い物ねだりをしている自覚はあるんだが、こればかりはどうもな。

と、そんな事をぼんやりと考えていたら、オルトレマーレ君が手をソワソワし出す。帰ってきたんだな、とドアを見れば勢いよく扉が開き、オルトレマーレ君お待ちかねの村上さんが、池田さんと一緒に入ってきた。

「たっだいまー、オルトレマーレ♡ 四日間良い子にしてた？」

村上さんが笑顔で両手を差し出すと、飛び込むように抱きつくオルトレマーレ君。帰ってくるど何時もこれだ、最初は感動の再開だなんて見ていたんだが、最近はどうもペットホテルに迎えにきたご主人とワンちゃんにしか見えなくなってきた。

「すまない伊達君、買い物に付き合っつて貰うことになつて」

「構いませんよ、俺も望月に買ってやりたいものがあるんで」

「白妙を連れていくと、視線が結構痛くてな。望月ちゃんがついてくれていると、そんなに気にならないし。本当は楓にきてもらう予定だったんだが……どうにも都合が合わなくて」

頭を下げてくる池田さん。因みに楓さんというのは、最近できた彼女だそう。なんと、以前行ったオランピアのパーティーで知り合ったのだとか。俺が望月と展望室で景色を眺めている時に、いい感じになっていたんだろう。白妙ちゃんも、きちんと懐いてくれているようなので、その内に同棲したりするんじゃないかな、いいことだ。

「あつ、そうだ伊達君」

「はい？」

ぎゅうぎゅうとオルトレマーレ君を抱き締めていた村上さんが、突然話しかけてきた。何かいいことがあったのか、何時も以上に満面の笑みだが……俺何かしたか？

「会社で付き合いのある弁護士に、伊達君と望月ちゃんの事を話したのよ。そしたら彼望月ちゃんの気持ちに凄い感動したって言ってね」

「はあ」

「今度、店に来て望月ちゃんに会ってみたって五月蠅いんだけど……いい？」

「別に構いませんよ。この店は見学だけでもOKですし、俺もそこまで望月を気に入ってもらえるのは嬉しいです。望月も問題ないよな」

「うん」

「ありがとうー、連絡すれば直ぐに都合つけてくると思うから。ああ、それとね」

「……ここでまた、村上さんがニツコリと笑う。」

「彼ね、望月ちゃんを養子にしたいとも言ったの。どうする?」

「……え?」

「感動したって言ったでしょ? 現実を変えられなくても、書面上は人にしてあげたいんだって。そうすればほら、色々と便利じゃない」

「いや、凄く助かる申し出なんですけど……ど、どうやって?」

「さあ? 私の要求をちよつと無茶な方法でクリアしてくれる事もあるからちよつとグレーナやり方みたいだけれどね」

成る程、これも聞かない方がいいわけか。まあ、いいや。

「なる早できてもらえると、俺が嬉しいです」

「任せといて」

「どうしたの? 伊達君」

「……近い内に『伊達望月』になれるぞ」

一瞬キョトンとした表情を作るが、直ぐに意味を理解したらしく、あの時海で見せてくれた極上の笑みを浮かべる。

「本当？ 嬉しい」

……俺の敗因は、店長たちの前で言ってしまった事だろう。

「結婚おめでとう伊達君！ 丁度『天国の涙』が二つ残っているから、それを使って指輪を作ったらいんじゃないかな。価格は、買取の時と同額で構わないよ」

「え？」

「いいですね、今井様。ならば私は、知り合いの職人から腕のいい彫金師を紹介して指輪を作りますよ。何時ものように、ローンも受け付けておりますので」

「ええ！」

「伊達君、ありがとう」

「ヴッ！」

その後、売らずに残しておいた『天国の涙』の存在を思いだしたものの、何だかんだでフルカスタムした自動車のローンを組む事になった。今年中に返済終わると思っていたのに……。

更に数週間後、無事に養子になった望月が「結婚式のお金を貯めたい」と何故か耳搔き店で働きたそうとするのを止めるのに骨を折ることになる。